

星になったタシユケントちゃんとデバフのジェノくん。

光蜥蜴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんやかんやあって人間が溶鉱炉の秘密を知ったせいで一部の妖精さんが超本気になってしまつて人間を滅ぼしてしまつた。

それからのお話です。

気ままに書いているので完全な推敲はしてません（めんどくry）
暇つぶしに書いてるので不定期更新です。

字の文多いですが、台詞の場合は台本形式のように「」の上に発言主の名前がありますので、小説形式としては邪道なのかもです。

閲覧設定で文字の大きさは4つ5つマイナスにしたほうが見やすいかも。

すみません。長くなりました。

目次

？ 7 話	？ 6 話	？ 5 話	？ 4 話	？ 3 話	？ 2 話	？ 1 話	？ 0 話
Т а Ш к е Н Т							Т а Ш к е Н Т
84	74	64	56	40	17	6	1

全てが凍りついた世界で一人の少女は吹雪の中、真白の空を見上げる。聖書の言葉を羅列し、軍歌を歌い、人間のいなくなった雪の季節の町で、孤独を口ずさんだ。

息を吸えば肺が凍りつきそうだ。句読点のない慣れた勇気と栄光の言葉をしゃべり、真白の景色を往く。雪の積もった霊園の敷地、その境界線を超えた先にあるのは水溜まりだ。

自然現象により地形が変動し、低所となった場所を水が埋めている。歩けばちやぷちやぷと音が鳴る。兵どもが夢の跡もただ水浸しでわびしい。

——人間が破滅した日がいつだったか、カレンダーがないから分からない。

あの日の仲間の言葉をよく覚えている。

あのバフの効果紋——生まれたての小鹿のような駆逐艦でも姫の装甲を一発で貫き、沈めるほどの強化効果があった。深海棲艦が脅威から害虫レベルの敵と成り下がり、戦いの終わりを誰もが予感した時代だ。

溶鉱炉の真理解明に誰もがトゥルーエンドの結末を思い描いた。

妖精の逆鱗にさえ触れなければ、手に入った。

可愛らしく従順で人に協力的な妖精が、反旗を翻すだけですべての望みは根本から潰えた。建造解体開発改造に加えて艦載機も含めた装備も管理できる立場なので当然なことなのだが、不意打ちだ。ボイコットですら致命的な打撃を与える身内が、その全ての知識と技術を戦闘力に換えて人類殺戮を行う。

戦いが終わるどころか、世界壊滅の危機となる。

——そりやねえだろ。

当時の提督が乾いた笑いを浮かべて言った。

彼女は艤装を展開し、キープアウトの境界線を一步、超えた。2頭身のデフォルトの妖精がいる。エンカウント。妖精はカーンカーン、と開発音を出していた。

人間と艦娘と深海棲艦を消し去った能力値を解放していた。

改造された妖精の耐久値——9000超え。

強く乱れた潮の匂いのする旋風が身を襲い、巨大な生物が現れた。耳をふさぐ。騒音が酷い。水柱が高く激しく舞う。鋼のように堅そうな爬虫類のような鱗と、瞳、凶悪な獰猛性のある尖った牙からは粘着質な涎が垂れている。

視界から空を奪うように巨大な両翼が広がった。

神話空想のドラゴンそのものだ。

火炎袋から発射される弾丸は海をも燃やす延焼効果がある。こいつにはソロモンから撃ち放った弾丸がイギリスまで貫通したという眉唾の報告もある管理妖精もいる。

そんなのが無限沸きする軍団に勝てる訳がなかったのだ。艦娘と人間と深海棲艦が束になってかかって敗けた相手だ。艦娘や深海棲艦よりも遥かに凶暴で強い。

その大顎を開けて轟いた咆哮とともに粘着質な唾液が顔に飛んできた。

この艤装砲撃で鱗は貫けず、人間の叡智を持って作った兵器の数々は深海棲艦と同じく無効化。絶体絶命の人類。その75億が勇者となっても勝てなかった事実。

その馬鹿でかい頭を軽く振るだけで、この小さな身は吹き飛び、撃沈損傷となる。

穴の空いた腹から赤い血とともに、空色の液体が漏れだし、グジュグジュとスライムのように傷口を塞ぎ始める。同志がこそこそと貯めた燃料弾薬鉄ボーキ、その全てが内臓してあるこの身は何回殺されたら死ぬのかすら分からない。

溶鉱炉——ここから艦娘も深海棲艦も制御できるといふ結論が出た。艦娘は資材を溶鉱炉に放り投げて建造する。艦娘はドロドロの状態で、すでに生命としての存在は成立している。

人間の形をしているのは、溶鉱炉内で『改造』が施されているからだという。

炉の解明道中に様々な実験が行われたその中でも彼女は唯一無二

の成功例だった。資材と高速建造材の内蔵型で資材が尽きるまで何
度でも疑似女神が発動して瞬時に継戦可能となるどころか、鉄とい
う素材を使つて剣を造るように、艦装の形状をいじくり回せる。

そんな最終兵器彼女が全力を出してなお、妖精には1に満たないダ
メージしか与えられないが、最後の形としてそれでも、という思いは
この胸にいまだある。

かつては栄えていた場所も人がいなくなれば、空しただけの鉱物の
塊だった。過去、この場所ではしゃいでいた人間達を想うと、連鎖し
て鎮守府ではしゃぐ仲間達の姿が思い浮かぶ。全部、失ったけど、多
くを奪ったこいつの首を獲りたい。

もはや過去の情熱だった。今は無気力で死んでるように生きてい
る。

「ようやく星になれるんだね」

パーハの帽子の星に触りながら、誰に聞かせるのでもなく、囁い
た。星になる。人間はみんな星になった。教わった分け合う精神を
大事にしたからか、人がいなくなつてから孤独の意味を知った。人
間なら誰でもいい。また戻つて来てたくさんのお話をしていて欲し
かった。

世界に独りになつた時、およそ戦争と言える現象は消滅した。彼女
はどうとう同志の悲願を達成したとはいえた。分け合う精神のむな
しさも知つた。一ならば全て自分ひとりで割り切れる。分け与える
ことの幸せと、分け与えられない不幸せと、共有できない空しさだけ
が、胸にぽつかりと穴をあけた。

一人になつてから、収集した本を読み尽くした。空想を貪ること
で孤独を紛らわし、やがて読む本が尽きた時、孤独の衝動が彼女を外へ
と誘つた。

もう、限界だ。勝つか負けるかだけでなく、死に場所を求めるの
ら、答えはケンカを売る以外になつた。

孤独になつてから80年、廃墟となつた鎮守府にはいくつの正の字
が記されている。

「もう、限界だ」

膝を崩してその場に背中を丸めて蹲る。世界の仇を前にしても「今更、誰もいない世界を救ってどうなる」と自分がささやき続け、抗う気力が奪われ続けていく。「二人は、嫌だ」生き残った最後の一人として幸福を、そんな強がりもメツキのように剥がれ落ちる。

雪の中に顔を埋め、熱い涙が一粒、頬を伝う。

「――人間は」

竜が、理知を感じさせる声を発した。喋れたのか。

「人間は、この星至上の妖精でした」

「効果紋。溶鉱炉の建造過程で艦娘のステータスが決定されていることが確定し、溶鉱炉を究明したことで、建造途中の溶鉱炉に自らに妖精の力を宿すことができた。私達の性能の一部を身に宿せたのは彼等が妖精だからです」

BUFF、DEBUFF、HEEL、ENCANT。

人間のその力があればどんなやつでも負ける気はしなかった。

倍率の問題で管理妖精との性能を埋めるまでには至らず、だ。

「彼ら以上の無邪気を持つ生物はいまだおりません。生きる為という解釈よりも、与えられた玩具を遊び尽くすそのクリエイト力は文明を発展させましたね」

「人間は自然の精の長、彼らの性質、自らの心身の欲求によって創造も破壊も行ってきました。人間以上に妖精らしい妖精もおりません。なので文明も自然の一種であり、文明破壊が結果として滅亡となったまでのこと。人の社会のシステムで人が本来の寿命を全うできない死因のその全ては自然淘汰と解釈する私達です」

「結果、退屈になったので、次の遊びを考えました」

「人間は他の場所から連れてこればいい。世界は史実と炉の神秘で繋がっているのですから」

陽気に笑った。CGで製作されたかのような荘厳なその竜の姿は、アニメ風のコミカルさが加えられた。

「あなたは提督の指示なら大破進軍でもなんでも従いましたよね。その提督の最期はあなたに特攻を命じた後に一人だけ逃げるような肉体的苦痛は差してない自決」

「従ったのは命令ではなく、あくまで同志の勇気の決断だ」

「楽しいのですかそれ」

「そんな感覚じゃないよ。ただ沈んでも、またあたしを探し出してくれるって信じてるから、耐えられていたんだ」

今は指揮を執る人間が一人もいない。だから、消える。

これが本当の死なのだろう。心底、そう思う。

「効果紋は五種、あります」

「SAVIOR——救済紋です。あなたの魂の成れの果ての力。出会いと別れの季節の色に輝く効果紋を宿した人こそ、あなたの運命の人となるでしょう」

「多分」

運命の人。そんな人がいたらつかんで離さないんだけど、桜色の効果紋なんて歴史にただの一つもない。青がほとんど、たまに銀、稀に金だ。虹や桜もあるのではないか、といわれているだけに過ぎず、確認できていない。

死ぬ間際に与えられた最期の希望。

「FRPG式の戦いで、また楽しく遊ぼう」

ただの無邪気なゆえの妖精の残酷だ。

「今はおやすみ、星船の子よ」

「いつかあなたを建造する人が現れるその日まで」

火炎を帯びた鉄の塊が竜の口から発射された。

熱いけど、寒い。炎で燃えて深海に沈むかのようなだ。エンチャント・ドラゴンの特性、燃焼による継続損傷がこの身が覆われる。資材が尽きるまで続く再生と、死ぬまで継続する燃焼がこの身体の上で争い続ける。炎に包まれ、朽ちていく最後も彼女には慣れたものだ。

やがて再生力も底を尽き、身体が資材化してゆく。

「ダスヴィダーニャ」

彼女の琥珀の瞳が星々のように煌々と輝いたのは、いつか同志が語った夢の景色に今が重なったからだ。紅い血に濡れた空色の艤装が、夕焼けに燃える茜みたいだった。彼女の眼にはかつて同志が海で追い求めたという暁の水平線のように映っていた。

？ー話

目出し帽を深くかぶり直す。「確か空港は金属探知機で通行止めになるが、駅は基本、大丈夫なはずだよな」ルールと常識は似て非なるものだ。仮にあってもこの世界の金属探知機では反応しないはずだ。やましいことなぞなにもないが、この不安は例えば札束が詰め込まれたアタツシユケースを持ち込み、駅員に見つかつたら警察沙汰にならないだろうか、というのと同種の不安だ。なにも違法性はないはずなので、堂々としていることが大事なはずだ。

朝霜（持ちこんでいるものは銃刀法違反つつう次元ではねえけど）駅の改札口をくぐり、エスカレーターに乗って、ホームへと出る。冬休みとはいえ平日の昼間だからか、ホームに人はまばらだ。制服の警官を傍目に列へと並ぶ。電光掲示板を見て、再度、路線を確認しておく。

朝霜「しっかし、舞台が海に限定されねえってだけでこうも出会えねえものか」

この世界に來ている仲間がいても、今回の仕樣的に目的がばらける。管理妖精をぶっ潰したいやつ、平穩に暮らしたいやつ、いずれにしろ目的が一致しなければかつての仲間であろうと敵対関係になるし、深海棲艦と手を組むこともあり得る。

朝霜「あたいの白髪も黒に見えてるんだろうな……」

齒をがち鳴らす。愛嬌ともいわれた白髪の髪もギザ齒も、この世界からしたら異常であるはずなのだが、周りの人間には違和感なく迷彩がかかっているようなのだ。

この都合の良い異世界はなんなんだ。

朝霜「はあ」深いため息をつく。

三度目の転生だ。一度目の記憶は軍艦のもの、二度目の記憶は艦娘時の記憶だ。二度も役目を終えた船になにを望むのか。しかも今回は転生の上に異世界がつくときた。良い予感はしなかった。

朝霜（三部で最終章ってホントかな）

四号車の後ろのドアから車両の中へと入った。電光掲示板に流れ

る情報に、座席に座ってスマホに映る芸能人を眺めている青年がいる。

陸にあがれば、海の上で生きた身でも井の中の蛙だと知った。

バッグから生物図鑑を取り出してパラパラとめくる。今のところ唯一の趣味だった。一文無しの時に偶然、拾った本だが、見たことのない生物のメカニズムが事細かに記されていて面白かった。

朝霜「いつかペットショップとか本屋で働いてみてえもんだな」

この世界に第二次世界大戦の歴史はあれども、艦娘や深海棲艦のない世界の歴史を歩んでいる。いわば、暁の水平線の向こう側の世界といっても過言ではないのだ。抱いた儂い夢も胸の奥にひっそりと忍ばせている。

駅に停車して、数人の乗降車を眺める。

景色はすでに田舎といってもいいくらいの自然に溢れていた。

2

隣に男が腰かけようとした直後だ。

こなれた殺意を感じて、反射的にその男の首を払った。

突然の動作に呆気にとられたのか、男はとっさに腰を曲げて回避した。朝霜の手刀はまとめていた男のポニーを払うのみだった。髪の毛が長く、ダークなスーツを着込んだ男だ。

朝霜「誰」

人差し指でトン、と首筋を叩かれた。その箇所から痺れが波紋のように広がってゆく。口から吹き出る泡を拭う。男の人差し指の先にはなぜか針がついており、液体がぽたぽたと垂れていた。

朝霜「毒針？」

あ、ヤベえ、こいつ効果紋を持っていやがる。

この電車の中でドンパチする気か。「構わねえ」男の股間を蹴り上げるが、男は微動だにしない。昔、司令が男への必殺技といってただけどな。

「痛いですね……」

痛いので済むのはおかしい。艦娘の力からして普通の人間なら今の股間から身体が砕けて死ぬ。

「あの、泉山光と申します。朝霜さん、ですよね。話をしましょう」男は隣の席に座る。

面倒だ。物事全てが、だ。

本来なら協力して倒して向こうの世界の平和を手にするればいいだけなのに、無駄に異世界の存在を知ると、人間は蜜に群がり、対立し合う。

朝霜「どうして殺さねえ。あたいは毒のせいで隙だらけだぞ」

泉山「その本を見て気が変わりました」男は柔らかく微笑むと、バッグの中の動物図鑑を指さした。「あなたは人間以外の動物の為に死ななければならぬ」

唐突かつ意味不明な話に狼狽するが、泉山は説明もなしに続ける。

泉山「あなたが達が関わった戦争では空襲の際に動物園の動物の殺処分が決定されました。空爆により逃走し、その際の暴走を危惧した処置です」

ああ、一度目の時代の話か。

泉山「我が子のように愛してきた飼育員の手によって、熊は親子ともども槍で突き殺され、毒餌を食べない黒豹はワイヤーで絞殺されました」

朝霜「象は皮膚が分厚くて注射が効かないからと意図的に餓死させた」

二度目の生でどこかで読んだことがある。実話だったはずだ。二度目の生を受けた時から、自分の艦船としての記憶が途切れた後の歴史を調べることは必然だった。恐らくほとんどの仲間がそうしている。海でなく、陸の歴史の知識もそれなりに備わっている。

泉山「象は当時から皮膚が薄く血管のある耳から採血をしていたはず。当時は物資も食料も不足していたのは身を以て思い知っているでしょう。つまり、動物ですら飲まず食わずで耐えているんだぞ。そうやって当時の戦争のプロバガンダに利用されたに過ぎない」

悲劇の話は耳たこだ。二度目の生で人類の破滅さえ見た彼女に

とっては戯言だ。

朝霜「だからなんだってんだ」

戦争はダメなことですか。厳密には違う。人を殺すのがダメなのだ。その戦争が起きる仕組みの根本を全く潰せずについて、また別のプロパガンダに発展しているのが人の歴史のように朝霜には思える。人が人を殺すのは避けられない。真理の気配すら感じる。

泉山「だから、あなた達は駆除されなければならない」

彼が胸のポケットから鉄片を取り出した。その鉄片が誰のモノかまでは分からないが、仲間の断片であることは分かる。恐らくこの男に狩られた誰かなのだろう。要は殺しても死なない為、殺して鉄片化させるつもりのようなのだ。

ハハ、と心の中で笑う。

こんな風に鉄屑になれば引き揚げられた軍艦のように大事に保管されるのだろう。しかし、肉体を持って意思があり、人智を超える力を有していれば、そんな温かな結末は途端に難しい。

朝霜「今度こそあたいは自分の幸せをつかむ」

泉山を全力で突き飛ばして駆けだした。

泉山「大人しくコレクションされてください」

何の考えもなく走ったからか、方向を間違えた。車掌室のほうに来た。騒ぎを駆けつけたからか、車掌室が開いた。

泉山「すみませんすみません、邪魔です」

乗客に謝りながら、隙間を縫うように追ってくる。

朝霜「この唐突なエンカウント仕様がクソ過ぎんだよな」

窓を叩き割る。窓ぶちをつかむと、鉄棒の逆上がりの要領で車両の屋根上にのぼる。ここなら時間を稼げるだろう。

電車の上で座り込む。さすがに飛び降りる勇気はないが、路線的にはもうすぐ湖が見えるはずだ。そこに飛び込み、艀装を展開するか。

泉山「待ってくださいよ」

朝霜「のぼってくるのかよ」

泉山「任務で手に入れた輸送中の鉄片があるはずですよ」

やっぱり狙いはソレか。絶対に渡せない。

朝霜「その動物属性付与の力、面白いな」

朝霜「深海棲艦は動物判定されてんのか」

その艦装を観ればその効果紋は誰を建造して烙印したものかも一目瞭然だった。

隆々とした腕を地面につけて、計四本の足で立っている。禍々しい背の光輪も含めて、間違いなく深海日棲姫の艦装だった。

さすがにあいつと恰好は違う。

あいつは格衣のような、陰陽福のような着物から伸びた骨の手、その指の先は獣のかぎ爪のように伸びている。あの白い顔はお面を思わせるものの、麻呂眉と瞳には艶紅を塗ってあるかのような赤いラインがあった。目はつむったままだが、一目で分かり、撤退したくなるほどに人間離れた強力な異形だった。

泉山はあくまで艦装のみを真似ているのだが、その砲撃の威力を考えるとまず勝てない。

朝霜「はあ」

何度目のため息だ。

上手く行けばみんなこっちで生きていけるのに。食べ物が腐るほど溢れたこの世界で、みんなで美味えもんを食えるだけで、泣いて幸せを感じられるほどのはずだ。殺し合いの戦いから解放された上で、だ。

泉山「いずれにしろ、昔からの例に漏れず、相手の力量を測れもせずに突撃してくる間抜けな童は潔く朽ち果てれば良いんです。他人のために屍晒すのはあなた達の得意分野のはずです」

泉山が砲塔の角度を変えたのを見て、飛び降りる。

着水する前に艦装を展開した。

転覆を上手く免れて、そのまま面舵全開で逃走を図る。首を少し振って後方を確認する。泉山も電車から飛び降りていたが、着地失敗したのか、地面に寝そべっている。

朝霜「なんとか無事に……って嘘だろ!？」

泉山は起き上がり、艦装を液に戻し、人間形態に戻ると、爆発的な速度で走り始めた。

前方不注意だ。大樹に身体がぶつかる。艀装はこの程度では損傷
しまい。損傷したのは身体のうちだ。ギザ歯がボロボロと欠けた。

朝霜「やり返してやら！」

艀装砲撃。どれだけ身体能力が高くても人間では砲弾は躲せまい。
実際、回避はできなかったようで、男に直撃、か細い身体が吹き飛ん
だ。木っ端みじんにならない以上、なにか種はあるのだが、考えるよ
り、撤退を優先し、すぐさま湖へと戻る。

あいつはとにかくなにかしらの効果紋で陸の上を早く移動したの
だ。湖の上のほうがマシじゃねえかな、という考えゆえなのだが、

朝霜「なんだこいつ……！」

聴音機から反応を感知した。水の中をおよそ人間が出せる速度を
超えて進んでいる。

すぐ近くだ。足元の水を見下ろした時、右足に鋭い痛みが走る。

朝霜「カジキ……？」

鋭利に伸びた針のような口が右足が貫かれている。次の瞬間、カジ
キから人の形に戻った。足をつかまれ、海中に引きずり込まれる。艀
装展開中のあたいを引きずり込んでくるパワーだ。

泉山「恨みっこなしで」

気持ち悪いカラフルな色合いだった。

いや、その色合いは知ってる。

男は貯めた力を開放するように、拳を繰り出した。みぞおちに拳が
減り込み、その後、水中で光が発生する。吹き飛び、水面から陸地へ
と水揚げされる。

朝霜「……けほっ」

深紅の命の塊を口から吐き散らす。

泉山「艦の娘様といえど、即死損傷のはずですが、心臓を狙えば良
かったです」

朝霜「……なんかの毒針、チーター、カジキ、シャコだろ」
露出した男の左手の甲が証明している。

朝霜「【ENCHANT・Animal】」

その文字が虹色に輝いている。虹色の効果紋は初めてお目にかか

る。下手したらこいつ自体が深海日棲姫よりも強いまでである。

泉山「動物、好きな人なので、なるべく苦しめないように」
突如として屈託なく、好意的に笑う。

朝霜「あたいは、命が好きなんだよ」

可愛く、強く、不思議な命がこの世にはたくさんいる。趣味といえる趣味がなかったので、暇潰しには持ってこいだった。男は嬉々とした顔を浮かべた。

泉山「シヤコの猛烈な加速度の打撃は水中の水分子を分解するんですよ。その際の莫大なエネルギーの放出量は太陽の表面温度に等しいほどだ。この打撃の後に行われるキャビテーションによる追撃は打撃自体よりも強烈という」

朝霜「キャビテーション気泡だろ?」

泉山「はい。さすがは艦船の擬人化生命体です」

軍艦のスクリュウのプロペラが劣化する原因だかな。騒音がひどいため、高速ステルス潜水艦の設計をすれば悩まされる課題であることが知識として頭にあった。

泉山「最も、シヤコの構造を真ねて放ったその一撃をまともに急所に喰らって、今まだ鉄片化していないあなたのタフさには呆れ返るのみです。急所に当たれば深海日棲姫も一撃で鉄片化したとっておきです」

腕が自壊しているが、機能の一貫だったはずだ。あえてヒビが入ることでバラバラになるのを遅らせる構造をしているのだ。凶鑑に書いてあった。

泉山の動物属性のエンチャントは強力そうだが、その反面、使い勝手は悪そうだ。もしも自由に付与できるのなら、この身を蟻にでも変えちまえばいいだけだ。なにか制限がある。

朝霜「負けだ負け」

さすがにこいつを倒すどころか逃げる手段も思い浮かばない。

負けだが、負けを受け入れるのはまだ早い。兵士として戦っていた時代、この程度で根をあげていたらただのお荷物である。命ある限り独りでも抵抗し続けなければ、また悲劇で終わってしまう。

泉山「鉄片を渡してください。大人しく投降したのなら」

朝霜「この鉄片で建造できる兵士を知っている風だよな」

朝霜「日進さんも終末期に人間が造ったこいつのヤバさをよく知らねえはずだ」

穴の開いたバッグから覗いている鉄片を抜き取った。

朝霜「ソ連の兵器が眠ってる」

泉山「艦娘ですよ。世間でいう小悪魔系みたいな子です？」

そのニュアンスから艦娘に抱くイメージが伝わってくる。言い換えれば、悪いやつじゃないだろ、だった。だから制御はできるし、交渉も可能だろう、と踏んでいるのが透けて見える。ここに眠るのは管理妖精相手に時間を稼げた唯一無二の『星の兵器』だ。

朝霜「お前もなにか未知の魔法でやりたいことあんだろ？」

泉山「ええ。家族、同胞に報いるためにこの世から密輸を葬り去ること、ですかね」

仇を討つのではなく、報いるため。建設的な復讐動機なこった。

あたいもろくな死に方はできねえよなあ、とは思う。むしろ客観的にはそこらの死刑囚が可愛くみえるほど、遥かに人を害している艦船としての記憶がある。艦娘や深海製管の存在し得ないこの世界なら、と思ったが、上手くは行かないようだ。

泉山「王手」

朝霜「お前の相棒さ、深海日棲姫だろ。社会に溶け込んでんの？」

泉山「彼女は面白いですよ。そうですね。とある世間話、少子高齢化について」

笑った。ケタケタ、といった擬音が聞こえそうな嗤いだ。

姫種はまず人に仕えるような生物種ではないが、損得を思考することができる。深海棲艦の中でも人間らしく、社会全体のことも考えられるが、思考がストレートだ。

泉山「『ガキでもさらってこんか。婦女暴行犯でも野に解き放て。お前ら艦娘全員に出産ノルマでも課せ』」

そう。深海棲艦らしく、まるで人を観ていない。

朝霜「今となつては可愛く見える程だよ」

泉山という男の眉根が寄った。そろそろ、気づいただろうか。これほど、鉄片の危険度を語りながら、なぜ処理していないのか。

朝霜「こいつについてよく知らないなら聞いておけよ」

朝霜「通常、艦娘は資材で建造される際に核となる鉄片が形成される。深海に沈むとその核が変質し、深海棲艦となる訳だ。手前の相棒の場合は日進の反転存在な訳だ。艦娘、深海棲艦は性質が違うだけで核となる鉄片が木っ端みじんに砕ければ命として終わる」

朝霜「そもそもなんであたい等が人の形をしているか知ってるか」

泉山「溶鉱炉、ですか」

食いつきがいいな。こいつは動物の話となると、盲目的になるのかもしれない。

朝霜「資材がこんな風になるんだぜ。魔術生成するゴーレムとかそういうのに近えよな。炉の中であたい等は基本値まで設定され、固定されてんだ。あたいは何回、建造されても朝霜というあたいは朝霜という兵士のステータスのままで」

炉の中にはそのステータス設定に介入した産物が効果紋だ。強化、弱体化。回復は入渠システム、付与は艦娘が人間に改造されるシステムを人間に混入させる手段から成り立っている。ここを詰めれば、あの海の真理が読み解けるのだ。

朝霜「エンチャント・ドラゴンは艦載機だ」

泉山がぼかん、とした顔になった。艦載機って妖精さんが操縦する小さな戦闘機、または深海棲艦型の禍々しい造形だもんな。その事情を説明する。

朝霜「あたいだってもともと資材だった。でも今、女の姿を模している。深海棲艦もそうだけど、人と同じ感触なのにやけに頑丈だろ」

朝霜「肉も鱗も牙も全部、あたい等が人間を逸脱性能したのと同じだ。端的にいつちやえば、あの竜は艦載機を肉付けして超強化したやつだ。見た目がファンタジーすぎて混乱すると思うけどさ」

海の仕様に関して他の管理妖精も思い当たる。バツファ・ケートス、クジラを模した管理妖精だ。あのバフ乗った一撃がインドネシアからイギリスまで貫通した時、思わず笑っちゃった。あのクソ鯨が現

れる前、太平洋深海棲姫のやつがいつていた。

『チクシヨウ！ 私の艦装をパクったの誰だよオ！』とそう切れてた。思えばあのクソ鯨は太平洋深海棲姫の艦装を馬鹿でかくして要塞化した感じだ。なので、管理妖精はあたし達の仕様がモデルの可能性が高い。

泉山「理論はよく知りませんが」

朝霜「あたしも知的派じゃねえよ。ただよく思い知る立場にいただけだ」

朝霜「ドロドロになった資材のあたり等が人間化する過程で人間の能力を宿すんだよな。つまり溶鉱炉の力は人間にも影響する理屈がそこに発生しちまってたってわけ」

朝霜「手前らのように人の脅威となる性能値をさくつと用意しちゃうのが建造炉だ。終末期が幕を開けたのは、人がその力の限界を究明しようとしたからなんだよ」

泉山「春川泰造ですか？」

好奇心が勝っているのか、まだまだ時間は稼げそうだ。

朝霜「ああ。一人の馬鹿が制御方法も定かではないままに水平線に勝利を刻むために」

朝霜「その力を内包した兵士を最後に建造した」

朝霜「その唯一の成功例がこの兵士に眠ってる」

朝霜「管理妖精はこの星が残る限り、命を終えることはない。星は自然を示しているそうだが、その自然には人間も含まれると来た」

つまり、星がなくなるまでは生き続ける。妖精は殺せても絶滅させる為には――

この星全ての命を葬り去る他ない。

人間では絶対に勝てない理由である。ソレをやろうとする存在の鼓動が脈打てば、地獄絵図が展開されるのみだ。あたいらは深海棲艦との闘いでも絶対にこの言葉を使わないようにしていたが、『戦争』で済めばマシだ。

朝霜「見逃せ。あたいはこの星の命全てを背負った輸送任務中なんだ」

泉山「どこへ」

朝霜『コレ』の消し方を知ってそんな奴をこっちの世界で一人だけ知ってる。終末期に一人でここに逃げ込みやがった。今はもう司令も高齢のジジイだろうけど」

泉山「しかし、それほどまでに強い兵士なら効果紋のある人と協力することで」

朝霜「終末期、もっとも人間に酷使されたのはこいつだ」

朝霜「あたいが知るだけで無意味な作戦で三桁は沈まされている」

朝霜「使命から解放された今、建造したら一人を公に殺して、その後にもずる式に出てくる人間をまとめて殺せる。それができるやつなんだよ。分かってくれよ」

泉山「深海日棲姫さんから彼女の噂は聞いていますし、奪え、と命令したのも彼女ですが、確かにそうですね。彼女ならこの世界度外視で建造するはずですよ。危険ではありませんね」

泉山「すみません、私、生まれた時から馬鹿なんですよ」
腕を組んで、目をつむる。こちらを気にしている風ではなかったの
で起き上がり、踵を返した。追いかけてくると思いきや、まだその場
に突っ立ったままだ。

話せばわかるのならあれほどの騒ぎを起こす必要もなかったはず
なのにな。

人間のくせに、暴力に関する価値観は深海棲艦よりといえよう。

朝霜「あの人間、出会った中では一番、強かったかな……」

虹色に輝く効果紋なんて初めて拝んだ。

エンチャント・アニマルっていう時点で化物染みてる。

あたいにエンチャントして蟻にでも変えなかった時点で色々制限があるんだろうけどさ。

?-12話

地獄の就寝だ。

「泣けば許されると思っているのか」

「申し訳ありません」謝る。泣きそうだ。

春川のジイさんが激怒している理由は就寝の着替えを30分待たされたということのようだ。

「人が死にそうになっていたんです」ちょうどストレッチャーを運ぶ葬儀屋がフロアに入ってきた。隣の部屋の看取り期の老人が死んだのだ。だから後回しになった。それを説明しても、春川のジイさんは全く理解を示さない。

今日に死んだお婆さんはジエノがここに就職して、新社会人としての苦悩に苛まれていたのを優しく励ましてくれた人だ。そんな人がついさつき死んだ。「同じ料金を払っているんだろうが」だが、このジイさんは人の話に耳を貸さない。

ジエノ「申し訳、ありません。以後、気をつけます」

かすれた声を出して、ジエノは部屋を後にする。フロアに戻るとすると「待て」と声をかけられたが、待たずに部屋を出た。まだ仕事が出積みだ。

時刻は夜21時、フロアには杖を持ったバアさんが眠りから覚めて徘徊していた。この人を寝間着に着替えさせなければならぬ。トイレにも行かせておかなければ失禁して、寝かせておかなければ夜勤の仕事が増えてしまう。

ジエノ「もう夜ですよ。寝ましょう」

「私の家どこお」「ここですよ。お名前書いてありますよ。見に行きませんか」部屋のネームプレートを突き付けると。「違うわ」と謎の返答、「ここですって」「違う」「合ってますって」「お前はええ。近づかんでええ。幽霊やし、嘘つき」

謎にキレられた。時間喰われるパターンだ。

ピンポンピンポン、さっきのジイさんがコールを連続している。規則上、行かなければならない。「ちよつとこつちに来ましようか」バア

さんにいうものの、テコでも動こうとしない。

仕方ない。引き返してコール連打しているさっきの春川のジイさんの部屋へ。「お前、名前はなんだ」「寒河江です。おやすみなさい」フロアに戻ると、さっきのお婆さんが尻もちついていた。事故報告書の仕事が増える。立つてもらい、そのままなんとか部屋に誘導完了。

ジエノ「和子さん、着替えましょう。ね？」

「イイヤアアアアアア！」

金切り声をあげられる。「彼女とやればええやろ！」誤解だ。力のない足で蹴られ、細い腕で殴られ、歯のない口で噛みつかれる。慣れたものだ。慣れてはいけないのだろうけども、職員に対しての暴力暴言セクハラなどよくあることではある。

認知の人との意思疎通は難しいのだ。

ジエノ「少し離れるか……」

布団にもぐっているのを確認して、フロアに戻る。そそくさと事務仕事を五分間だけ行っていると、和子さんが出てきた。シルバーカーを引いてフロアの外に出ていこうとしている。ゆつくりと歩み寄って、正面に立ち、膝を曲げる。

ジエノ「もう夜中なので旦那さんは迎えに来ませんよ。明日の朝です」

「青い服と白い服、ばあと若い男や」

ガラスに移るこの二人のことだろう。

ジエノ「長生きすると幽霊が見えるつていいますものね。ところで今日は平日の木曜日です。旦那さんは今、仕事場で鉄砲の弾を作っていますよ」

「兄さんが戦争に出てってから、戻ってこん」

この人の兄さんは兵隊として満州に行つて戦死したと聞いている。「今は満州にいますから。でも明日は手紙が届く日じゃなかったでしたっけ」「そうやったか。木曜だもんなあ」嘘八百ならぬ方便八百を駆使する。よし、部屋に戻ってくれた。

ジエノ「家族を愛しているんですもんね。明日の朝になれば迎えが

来ます。寝坊したらあかんどですよ」布団をかぶして「おやすみなさい」

落ち着いた頃にコールが鳴ったのでさっきのジエさんの部屋へと向かう。

誕生日プレゼントとして送った花束が引きちぎられ、ゴミ箱に捨てられている。サービス残業までして作ったのにな。こういうのもっとも精神的に来る。

それを見つめていると、葬儀会社の人が開けっ放してある扉の向こうから「ご供養させていただきます」とあいさつをいつてきた。もうなんにも思わなくなってきていた。ひどい時は感情が凍結する。

「ねえお兄ちゃん、聞いてよ」

自走式の車椅子に乗ったお婆さんの愚痴が始まる。要約すると、入れ歯を渡したはずなのに、なぜか紛失して、ベッドの隙間に落ちていたとのことだ。

「泥棒が入ったわ。私がそんなところに落とす訳ないでしょ」

「そうですね。きつと誰かが間違えたんですよ。次からは僕が直接、受け取りに行きますね」実はあなたが日中に入れ歯を持ってベッドに移るのは4回も目撃してるんだ。最近、認知が進行してる。なにかもつとしてあげられたのならいいんだけど。

「誰かあー!」

今日は考える暇もないよ。

部屋に直行。和子のばあさんが背中が痒いとのことで、暴れている。

ジエノ「薬を持ってきますので」と背中を撫でて落ち着ける。その後、隙を見てかゆみ止めを取りにゆく。「あ」とジエノは声を出した。今度は「痛いわ!」と叫び声をあげている。そりや暴れまくって自分の顔を殴れば痛いよな。少し腫れているが、とりあえずかゆみ止めを塗りながら、顔を確認した。皮めくれだ。

ジエノ「やっちゃった……」

また今度、あの家族に謝罪しなければならぬ。前に虐待を疑われたことあるが、さすがに犯罪者扱いは心が堪える。

フロアの薄型テレビではちょうど介護福祉士による入居者殺人の報道をやっていた。こういう理不尽が細かく重なっていき、やがて爆発するんじゃないだろうか、とジエノはなんとなく加害者の犯行動機を予想し、反面教師として学んでおくとした。

コールを鳴らしているジイさんの部屋に向かう。

ただただ疲れた状態で「なにか用ですか」と耳元でいった。

なにも用はない、とジイさんがいったので、フロアに戻ろうとした時だ。

「しつかりやれ」

ごつん、と杖で殴られた。ジイさんは、腰を入れなくて杖を振り回したせいで、バランスを崩していた。ジエノは足と手を滑り込ませて、ジイさんの体を支える。

ジエノ「大丈夫ですか」

そう声をかける。

皺だらけの呆けたジイさんの顔としばし、見つめ合う。

「大丈夫か」オウム返しにされた。

ジエノ「大丈夫です」

大丈夫ではない。あなたの暴力で痣が結構ある。このジイさんに殴られて貴重な先輩職員が一人辞めてたつげな。思い出した。瞼の上に裂傷、全治三週間だった。先輩は治療費は自分持ちなのが納得いかず、抗議した。上の結論は、危機管理が不十分なために起きたミスとして処理された。不満だったようだ。

他の元軍人の老人は知らないけども、認知の人が強い過去の記憶で行動するのは珍しくない。鉄拳制裁も珍しくなかったのだろうし、上下関係が絶対の世界なのは、なんとなく分かる。それがこの春川のジイさんの世界のルールなのかもしれない。

「明日、お前はまた来るか」

ジエノ「来ますよ」

と返事をして、ベッドに臥床してもらおう。

ジエノ「敵はいないんだよね」

生き方を呪文のように唱える。

仕事が終わわり、家路についた。
施設が見えなくなった時、

「サファリパークみたいだった」

そんな仕事に疲れた夜の日の叫び。

もつとも、やりがいはある仕事だ。政府は自宅介護を勧めているが、仕事をしながら介護ではあの人達の面倒を見ることは難しいだろう。彼等が徘徊すれば、絶対に事件を起こす。それに、あの人達は悪くない。歳を取れば誰でもああいう風になっていくのだ。

——誰も悪くない。

介護は好きでも、心身的に堪える仕事なのは確かだ。
服の袖に便がついていた。今日はマジでクソだった。

2

亜斗「佐々木さん、次に胸を揉んだら飯抜くぞー」

「おう、老人虐待やってみたい」がっはっは、と嫌味のない顔で豪快に笑う。

亜斗「ああもう。ジエノつち、人がいなさすぎて風呂入れられるの私しかいねえの」

ジエノ「僕が来るんだから午後に戻せばよかったじゃん……あー、そういう日は午後からこの人は出かけるのね。明日は僕休みだし、回せないか」

亜斗「ジエノつちもよくばあさんに身体を触られているけど大丈夫？」

ジエノ「最近察知して回避できるようになった。亜斗ちゃんも耐性あるよね。あれか。前の仕事は動物園の飼育員やってたんだよね。ゴリラとかに触られてたのか」

亜斗「ゴリラはおっぱい千切れるわ。じゃあ、飯食ってくるよ」
ジエノ「ありがとね」

亜斗「いいってこと。私、結婚したら介護辞めるからー」
気遣いだろう。今の母の状況はすでに会社に報告してあるので、同

僚にも伝わっている。あえて手のかかる利用者の世話をやってくれたのだ。ちなみに亜斗は毎年、結婚したら辞めるとかいつているけども、高望みが祟って白馬の王子様を見つけられない模様。

気遣いも上手。その背の低さと童顔からして頬に赤ペンでぐるぐる巻きを描いて、ペロキヤンを持たせるのが似合うほどに可愛らしい女性である。本人のコンプレックスらしい。

今日はテレビの前にやけに人が集まっている。海外のアニメを放送していた。夢の国のやつだ。「フフフフー」と声真似してみると、婆ちゃんが「似てる」と笑う。適当にネットでそのキャラの画像探して数枚、プリントアウトし、色鉛筆とともに差し出した。

「あの一、寒河江さあん」

去年の春に入った新卒の女の子だ。杖を突いてのろのろと歩いているばあさんの三步ほど離れた後ろを歩いている。ばあさんの尖った唇を観れば分かる。なにか気に喰わないことでもあったのだろう。「赤ちゃんがいないって部屋にお戻りになったんですが、いなくて。多分、午前中に面会にいらつしやった娘さんが赤ん坊を連れていたので、帰ったことを忘れてるんだと思います」

「帰ったことを教えたのですけども、嘘をついているっていわれちゃいますってえ……」

ジエノ「なるほど、電話をかけるから。そっちの電話にね」耳元で声を出してみる。

「娘さんとお孫さんは帰ったそうですよ」といっても納得しないのだろう。なので夢島さんの持っている電話にかけた。「はい、繋がります」

耳元にピッチを寄せると、フロアの済みに移動した夢島さんが演技を始める。それでようやく納得したようだが、ふて腐れた顔のままだったので、よく会話している他の婆さんのもとへと連れて行って会話してもらおう。30分もすれば不穏も収まるだろう。

「寒・河・江えええー！」

みんなテレビ観てるのに急に叫ぶな。

ジエノ「ちよつと待ってくださいよ。今、この人のトイレ手伝って

いるから手が離せないんですって。ああ佐々木さん、今は午後三時です。昼ごはんはそうですね、食べてないんですか。今、準備してくるから大人しく座ってて。ね？」車いす押しながら認知の対応。

「だってかまって欲しいんだもおおん！」

「うるせえな。殺すぞクソババアが！」

ジエノ「春川のじっちゃん、殺すはダメ」

春川のジイさんがキレだした。春川のジイさんは不穏になると暴力激しいから、一番ヤバいんだって。「大きな声出さなくてもいいでしょ、泰造ちゃん！」机の上のものを振り払う。まあ、新聞くらいしかないけども、踏んだら滑ってこけるので預かっておく。

「なんでその人の相手して私は無視するの！」

クツシヨンを投げ飛ばすな。

ジエノ「亜斗ちゃん早く帰ってきてくれないかな」

正直、人に優しくできる余裕が日に日になくなってきている。いや、相手を人として認識できているだけ、まだ余裕はあるかもしれない。「あいつら人権持った動物だ。施設っていうのは檻だろ。俺らが相手してるのは猛獣より厄介な怪物だ」そう吐き捨て、去った人間を知っている。コントみたいな誤解の末に殺されかけて、正当防衛が認められず、刑務所に入った介護士を知ってる。

人手不足な上、人の入れ替わりが目まぐるしい背景の裏にあるのは、恐らく認識の祖語だと思う。例えばお年寄りに寄りそう。それは綺麗な表現だ。理不尽な罵倒暴力セクハラは基本的にまず耐える。対策を練って、相手がそのような言動を取らないよう『コントロール』し、封殺するのだ。

認知の進んだ家族を自宅介護している人はさぞ大変だろう。介護疲れで悲しい事件が起きるのも仕方ない、と思うこの頃だ。かといって施設に入れるのも金がかかる上、激務で安月給なので人は集まらず、リーマンみたいに給料あがっていかない。基本、年金暮らしの高齢者から金は取れないうえ、金持ちは施設に入らないことも多いからだ。

「ちよつと君」

うわあ、と声が出そうになった。面倒な家族が面会に来ていた。「うちの会のじいさんが腰に傷が出来ているんだが」

春川のじいさんとところに疑いの目を向けられている。昨日もテレビで介護士の老人虐待のニュースやっていたし、心配ごとなんだろう。むしろ僕が杖で後頭部をブン殴られて流血したんですけど、いい返したいが、堪えて、事務所の人に連絡を取って投げた。

確認してみたが、ただのかき傷だ。寝ている時にかくだけ。日は暮れ、夜がやってくる。

地獄の就寝時間に、惨劇は起きた。

3

「あのお、あの一、どうしよう!」

と隣のユニットの夢島さんから連絡が来た。すすり泣きの声がある。事情を聞いたところ、婆さんが転んで頭を打って倒れたまま動かないらしい。現場に急行した。

フロアのフローリングの上には赤い血が溜まりがある。

声かけすると、意識はあるのか、返事があった。呂律もおかしくない。

記憶からマニュアルを掘り起こして対応する。人を呼んで救急に連絡し、足を動かしながら看護師にも連絡した。やってきた救急隊員に個人情報を保険証を渡す。付き添いを頼まれたけど、断った。介護士が現場を離れると、また同じことが起きかねない。一日、自由にさせただけで誰かが死にかねない現場だ。

後は病院に任せるのみ。

こういう時、人がいればなあ、とジエノは思う。不穩になって手がつけられなくなった拳句、ああいうことが起きる。一人しかいない状況で同時に歩行不安定の人達が何人も歩き出した時、分身の術を使えば、と本気で思う。夢島さんにこうなる前に誰かを呼べ、というのも今更酷だ。なぜそうしなかったか、とその後悔の涙の前でいえる訳がない。みんなクソ忙しいからな。真面目でお人好しの夢島さんが

誰かに仕事を押し付けることを躊躇う気持ちも分かる。

夢島さんは泣きながらいう。

「どうしよう。私、人を殺しちゃったかも……!」

そして大事な仲間の心が潰れてゆく。

ジエノ「僕がもつと早く気付いてあげられたら良かった」

慰める。こういう時、亜斗ちゃんがいればいいのだけでも、と思う。

亜斗ちゃん、一年目で蹴り飛ばしてきたジイさんに堪忍袋の緒が切れて放置した老人を転倒させて死なせちゃっている。ということで亜斗ちゃんに連絡を入れておいた。

今日は仕事が休みなのもあって、施設でその子を慰める為に居残った。

亜斗「例の家族が来たぞ」

亜斗「なんか事務所の相談員、電話を取らないし、こんな時に限って使えねえ! ジエノっち、あの家族に気に入られていただろ。対応してくれないかな!」

あいよ。

亜斗「それと夢ちゃん、川下のばあちゃんは無事だった。命に支障はないし、検査したらすぐ戻ってこられそうだった。額が切れただけみたい」

そりや吉報だ。

一階に降りて家族と会った。事情を説明するが、怒っている風だ。「何の為に預けているんだ」とか「この管理体制はどうなっているんだ」とかの声が飛んでくる。事細かに事情を説明した。春川のジイさんのところのように理解のない家族ではない。

ただ今この声を夢島さんが聞くと、心が潰れてしまうので、ここで止めなければ。

30分の会話戦闘の後、ようやく収まった。民事訴訟とか絶対負けるし、このパターンは下手したら裁判で何千万の損害を食らう。施設長が来たので事情を説明し、パスした。

夢島さんはまだ元気がなかったもので、亜斗ちゃんに頼まれ、この事件の記録を代わりに残しておいた。

よし、帰ろう。すでに起床の時間でフロア内は慌ただしい。

「寒河江さん、頼みがある。少し付き合ってくれ。あの人には話してある」と早番の人を指さした。「だから春川さん、寒河江っち仕事終わってるから」

ジェノ「いいよ。すぐ戻ってくるから」

春川のじいさんの意を決したような表情は初めて見た。

4

屋外の喫煙スペースに誘導して、座る。

春川「お前も一本、吸え」色々と問題があるのだが、この人に限っては施設から許可が下りている。この一件で手に負えなくなること、本人の強い希望があったこと、身元の支援会からもお願いされたこと、色々だ。

朝日がのぼっていた。

社会人や学生が行きかう正面の道路を眺める。

春川「俺、この世界の人間じゃねえんだよ」

突拍子もない意味不明な話は聞き手に回って受け流すに限る。

春川「そんでよ、鉄片が生き物になった世界だった」

ジェノ「初耳です。その世界では鉄が生き物なんですネ」

春川「船だよ船。人間の見た目でも、もとは軍の船だ。ずいぶん酷えことをした。俺の時はもう炉の解明が進んでいたんだけどよ、当時、その生物はな、ひでえ扱いだった」遠くを見るような眼で訳の分からない話を続ける。「人権を取り上げられたんだ」

ジェノ「人権って人の権利と書くやつですよネ」

春川「軍艦だぞ軍艦。人権を認めたら生まれつき大量殺人者になっちゃうから政治周りの謀略で面倒になるのが透けてた。都合が良い実験もやりやすかったからな」

今日の春川のじいさん、ずいぶんと調子良さそうだな。これは少なくとも、本気で過去だと本人は思っているパターンだ。過去の強い記憶は知っておくと役立つので、完全に聞き手に回るとした。

春川「世界が滅びそうだった時によ、こつちに来たんだが」

春川「俺はいちかばちか研究途中の理論を完成させて、成功例を作った。それでよお、平和な世界を見て思ったんだわ。深海棲艦もあの娘どもも存在しない歴史のこの世界ならあいつらは幸せになれたんじゃないかねえのかなって」

白煙を吐きながらいう。

ジェノ「ヘー」

ただでさえ疲れている。もう億劫だ。

春川「複数の軍艦の鉄片を資材として投げ入れたら。深海棲艦を解体して得た資材を投げこんだら。人間や妖精を資材としたら。妖精や深海棲艦は改造できるのか」

もうついていけなかった。春川のじいさんが心配になってきた。

春川「建造炉で兵士が生まれる過程でよ、基本値が設定されるんだわ。いじくりまわす技術を入手して人間を兵士に敗けないよう、強化した。バフとかデバフとかエンチャントとかヒールとか。人間が作戦以上の力を持ったから、大層、海軍人どもは喜んだ」

急にFRPGの単語が出てきたが、その話に引き続き黙って耳を傾ける。

例えばヒールなんかは入渠のシステムから創り上げたものとか、バフはその建造炉の数値をいじくって身体と艦装能力をあげるとか、デバフは数値を下げるとか、エンチャントは炎上などの熱を利用した追加効果とか、聞けば聞くほど理解が遠のいてゆく。

春川「ひでえことをしやがるよ。深海棲艦が艦装とひつつく力を解明して、仲間の死肉を喰らわせ続けたり、生きたまま建造炉に放り込まれたり、絶対に勝てねえ戦いに何度も突撃させたり」また自嘲的な笑みだ。「生まれた時から彼女らはなぜか俺らを脅威から守るからよ、そこまで理不尽な目に遭って『なんでそもそも人間を守らなきゃいけないの』っていう不満も吹き出すわな。中には盲目的な子もいたが、決まって良い子らだったのも」

春川「残酷だった」

ジェノ「春川さんもひどいことしたんですかね」

春川「ああ。それが最期に幸福につながると見た。彼女が報われる為には『使える得物』になるしかなかった。全ての脅威をぶっ壊しまうくらいに、だ。切れねえナイフは廃棄されるのがオチだろう。だから俺は研ぎ澄まし続けたよ」

春川「俺らの希望の星になるまで」

短くなつた煙草を受け取り、火を消した。なんだか眠くなつてきた。ふわあ、とあくびをした時にいった。「寒河江さんは俺が見ている限り、見どころがある。俺も良い性格してねえからよ、職員の皆さんには良いように思われてねえだろ。分かるんだわ」

言葉に困るな。事実ではある。調子に乗る人なので、そんなことないですよ、という気遣いが裏目に出たら誰も得をしない結果になってしまうかもしれない。

春川「寒河江、お前は俺がなにしてもよ、お前からはなんというか一度も敵意を感じたことねえんだよな。こういうのって心のありようの問題だからお前さんの才能だ」

よく分からないが褒められたようなので、礼をいっておく。

ジェノ「昔のことが関係してるんですよ」

結局、春川のじいさんがなにをいいたいか分からずしまいだ。

春川「だろうな。信念すら感じるぜ。なんか寒くなってきたな。戻るか」

ジェノ「ですね」

顔をあげたと同時に、陰が覆いかぶさってくる。

『『寒いかな。今朝は雪が降るほど温かいのにさ』』

「懐かしい異国のジョークが聞こえる」春川のじいさんは手を叩いて笑う。

朝霜「っていうかね、あいつなら」

朝霜「一度目は船か。二度目は艦娘で、まさか暁の水平線の向こうに次があつただなんてマジで笑えねえよ。この三度目で最後にすんよ。死ぬか勝つかの二択だ」

春川「おう」珍しく笑った。

朝霜「久しぶりだねえ。幸せに歳を取ったみてえで世の中の不公平さを痛感するよ」

おっと、しばらく放心してしまった。服装は短パンとTシャツと目だし帽とこれといった特徴はないのだが、冬であることを考えると変だし、やけにボロボロだ。白い色の髪が風で翻る、白髪の内側が紫だ。鮫のようなギザ歯も目を疑う。

「すげえ怒ってるな。心当たりが多すぎる」

朝霜「要件はただ一つだ」

春川「消す方法はねえ。この星と心中できるのなら話は別だが」

春川「隣の寒河江に渡せ。こいつとあの娘は相性が良いと思う」

春川「他の誰かが建造しちまう前に建造しちまえ。軍関係者は無論だが、権力者にも渡すな。絶対的な上下関係が生まれにくいという一般人でこそ、あいつの制御に向いてる」

まるで話についていけない。

朝霜「ぶっちゃけ宇宙にぽいっとしちまうのが良い気もするんだが」

朝霜「このガキに渡せば管理妖精を倒せるんだな」

朝霜「今までの手前の罪を全て赦す。だから、正直に答えてくれ」

朝霜「もうあたゐ、疲れた」

そういった少女の顔は笑っている。

春川「全て俺の嘘偽りのねえ考えだ。今更、欺くかよ」

白髪の娘は眉間に皺を寄せ、腕を組んだ。しばらくして、バッグの中から鉞物を取り出した。手の平サイズの金属の光沢を放つ物質だ。今日の空模様と同じ色をしている。「受け取れ」と投げられる。「ぶぐっ」腹に直撃した。うづくまる。

春川「寒河江さん、お前を男と頼んで頼みがある」

「なんなんですか」

春川「こいつは昔の俺の馴染みだ。今日一日だけ一緒にいてやってくれねえか」

春川のじいさんは身よりがなく、後援会が身元引受人になってい

る。昔の馴染みというのは少女の背丈的に真っ赤な嘘だろうが、今のらしくない感じが気にかかる。

春川「礼に亜斗ちゃんにセクハラする佐々木をシメといてやるからよ」

止めて。それこつちの責任問題に発展するから。

朝霜「こいつで本当にいいのかよ。なんかなよなよしてるぞ」

春雨「俺のほうがいいのか。この老いぼれになにができる」

朝霜「ま、初めての司令の最後の命令だと思うかね」

少女は苦笑いだ。その笑顔からは確かに春川のじいさんとの近い距離を感じさせる。

朝霜「あたいもコイツんところに着任しようかね」

春川「軍人どころか関係者でもねえ。ただの一般人だ。そこにお前らが生まれた瞬間から持っていた絶対的な上下関係も、人間を守る役割もなにもなく、対等だ」

そこで亜斗ちゃんがやってきて、「飯食いに戻りますよつと」と春川のジイさんの車を引いていく。「ちつす。ジエノ君の知り合い……？」そこで転んだ少女を助けて少ししゃべっていたとフォローしておいた。朝霜という女の子は「おう」と合わせた。

朝霜「積もるほど話があるな。あたいらも飯食いに行こうぜ」
妙な展開になっちゃったな。

せつかくの休みまで入居者のお願いで潰されてしまうが、春川のじいさんの過去の情報は仕事に大いに役立つので、ジエノは軽い気持ちで彼女に付き合うとした。

5

朝霜「介護士君か。へへ、あのジジイの世話は大変だろ」

ジエノ「難しい気質の人ではあると思う」

ファストフード店に行っても、意外と周りの視線は奇天烈な容姿をしている彼女に向けられていなかった。白髪の内側は紫ががっついていてギザ歯で片目隠しの子がいたらガン見してしまうと思うのだが、個

性に富んだ今なら意外とこんなものなのかも。

朝霜「良い世界だよ。深海棲艦も妖精も好戦的じゃねえ。食いもんはたくさんあるし」

ちよくちよく出てくる単語は春川のジイさんから聞くものと同じだ。ハンバーガーに「うまい」と笑顔でかじりつく彼女を観ていると、子供特有の純粹さを感じてちよつと頭を撫でたくなってくる。そんな愛らしさがあった。

ジエノ「君もあの艦の娘さんとか深海棲艦とか意味不明な話をよく聞いていたの」

朝霜「本当の話だ。異世界から来たつつつても信じねえよな」

冗談でいっているようには見えない。ヤバいやつなのか、と警戒心が強まる。

朝霜「その片鱗だけ披露しておくか。順を追うことは大事だよな」
少女は右肘をテーブルに乗せた、腕相撲の要求だろうか。

朝霜「ジエノって呼ぶな。ジエノは両手で良い」

同じく右手をセットして腕相撲の体制だ。朝霜の掌は期待を裏切らず、柔く小さい少女の手だ。「よいドン、全力で来いよ」といつても小学生高学年かいところ中学生の娘相手には躊躇われる。じよじよに力を入れていくとした。

朝霜「力は思ったよりあんだな。両手でやってみ」

ジエノ「マジか。びくともしない」

両手で対抗してみるが、一ミリも動かない。

大きな岩を動かそうとしているかのようだ。右手の甲がテーブルにつく。全力でやって敗けた。

しばらく放心していると、朝霜は十円玉を指で包んだ後、「このくらい海防艦でもできるけどさ、『あり得ない』を一つ受け入れられたか」ピンチ力だけで硬貨が折り曲がっている。

朝霜「ところであたいの朝霜って名前、初めて聞いたかよ。今朝と霜焼けの霜だ」

ジエノ「ま、まあ、初めて聞いたけど……」

朝霜「一度目のあたいは存在しているはずだけど、知らねえのは

いいことだ。戦争で名を挙げたもんの名前なんざ平和な今の時代にや不必要だが、スマホで検索してみ」

検索してみると、軍艦の名前で朝霜がヒットした。

朝霜「今の時代じゃ擬人化で伝わっかなー……」

朝霜「二度目は別の世界で今のこの姿だ。艦娘っていつてな、艦装っていう装備を使って海で深海棲艦っていう化けもんから人間を守ってた。第三勢力が現れてそいつらに負けちまったんだ。だから、今が三度目だ」

ジエノ「さすがに信じるのは無理だよ」

馬鹿げた力を見た今では、全く信憑性がない訳ではない。

しかし、だとしたら春川のじいさんがいつていたことがただの妄言ではなくなる。

朝霜「落ち着いてるな」

多分、疲れてるだけ。

朝霜「あたしは初期官向きじゃねえんだけどなあ。お前が渡したその鉄片を炎で一定時間、炙ればあたいと同種が生まれる」頭をぼりぼりとかいた。かつたるいといわんばかりの仕草だ。「んで、その鉄片を一定以上の深度のある海に沈むと、変質して深海棲艦つつう怪物になる。そいつらとあたいは戦っていたのが二度目の生だった」

その話は聞けば聞くほど春川のじいさんと共通点が見つかってゆく。

ジエノ「春川のじいさんいわく、なんか妖精がどうのこうのと」

朝霜「管理妖精」

ガチン、とギザ歯を噛み合わせる。

朝霜「とりあえず艦娘と深海棲艦の話から」

朝霜「艦娘から深海棲艦、深海棲艦から艦娘に変質を繰り返し、無限製造される上、生まれた時から知能は低くても15歳以上な上、心つつうもんがある」

朝霜「生まれた時から前世の動機だけで命令に従ってりや不満もたまるんだ。人間の暮らし、隣の芝生が青い効果も相まって」

朝霜「人間は知能の牙を持つ獣だ。それで戦う為にはあたいらと

違って十数年の時がかかる。あたいと深海棲艦が戦うにつれて最も致命的被害を受けていったのは人間だった」

朝霜「あの戦いはどちらが勝っても、人間はかなり減っていたはずだ。それが管理妖精が用意したシナリオだったんだと思う。司令……春川のジジイが建造炉を究明しちまうまではな。あたい達は資材から生まれてから人の能力を得ているみたいでさ」

朝霜「人間に適応する。そこを利用して逆に、あたいらの力を人間に適応させることが可能だという理論を構築した」

朝霜「あたいらはゲームのキャラみてえに性能が一定だった。あたいは朝霜でステータスは決まってる。練度、レベルアップの成長もな。だけど」

朝霜「後天的にあたいらの戦闘能力に変動を起こす力を技術化した」

朝霜『効果紋』っていう。バフとかデバフとかヒールとかいえば分かりやすいだろ。もともと似たような力をあたいらはシステムとして持っていた。例えば夜戦だと火力が高くなったり、入渠は回復効果みてえなもんだし」

ジエノ「戦況が激変してめでたしめでたし、じゃないんだよね」

朝霜「効果紋持った奴が深海棲艦と手を組んで厄介事持ち込んだこともあったけど、あたいら達は効果紋の性能のおかげで一年の見通しで決着がつくと見込まれていた。バフかけられりや突出した性能がないあたいでも姫や鬼の装甲をブチ抜けた程だし」

朝霜「もともと溶鉱炉は妖精が管理していた。あいつらは炉の力を熟知していたんだ。その領域に人間が踏み入ったことであいつらの瘤に障るなにかがあったんだらうよ。人間にケンカ売ってきた。あたいらも完全に解明し切れていない炉の力をフル活用だ」

朝霜「その力はあたいらの世界でもファンタジーだ。どうして火が海で延々と燃え広がるのか、何トンもある体重のくせにあの翼で空を飛べるのか、全く分からない」

朝霜「ああ、こりや終末期の話だ」

朝霜「あたいは途中で殺されて復活しなかったけど、人間が減んだ

みてえだぜ」

へえ、そうなんですか。

彼女は本気でいっているようだけれども、仕事柄、理解不能の話をかわすクセがついている。彼女に対して認知の人と同じ対応を始めてしまいそうだが、意味不明な話を始めるじいさんばあさんも本気で語っていることは分かるので、その姿勢で聞いておく。

朝霜「炉がヤバい代物なのはちよつとくらい分かったか？」

ジエノ「人間を滅ぼすことくらいヤバい代物だってことは」

そのレベルの兵器を放置していたなんて人間にしては間抜けすぎないか。

異世界人の知能が低いのか、止むを得なかったのか知らない。

あくびを噛み殺した。忙しかったせいとか、段々と眠気が瞼を重くしていく。

朝霜「起きろ、ここからが重要だ」

紙コップの水をぶっかけられた。服の袖で拭う。

朝霜「終末期、なりふり構っていられなくなった時、春川のジジイは一つの実験をした。姉妹艦が建造されていない艦娘を使って管理妖精に対抗する兵士を造った」

朝霜「艦娘は炉で建造されるだろ。その炉自体を丸ごと兵装化しちまおう」

ジエノ「人間なら生まれた子供が母親を内蔵しちまおうっていうくらい不可解」

朝霜「炉自体は人間じゃねえし、ただの無機物だけだな。艦装つう兵装に取り込むことができたんだよ。慎重に行っても、かなり突貫な面が発生、おまけに建造時間が数か月単位だ。平行していくつか仮実験を行ったが、四名中、成功といえたのは一名だけだ」

朝霜「炉の力を利用し、金属の形状を自由に作り変えることができた。対管理妖精の化物だ。建造された時点ではあたいらの希望の星だったよ。そいつの双肩に人類の命運は委ねられたんだから」

朝霜「タシユケント」

朝霜「それがその空色の鉄片に眠る兵士の名前だ」

ジエノ「ロシアの船？」

朝霜「ソ連だけど、知ってんのか？」

ジエノ「君が今朝は雪が降るほど温かったってアイツならいうだろうなっていったろ。それはロシアジョークだから、そうなのかなって思った」スマホで検索したら、ソ連時代の艦船と都市名がヒットした、けっこう戦時に活躍した軍艦なようだった。

朝霜「青年にややっぱりこういう話のほうが面白いかな」

朝霜「茶髪の二つ結びに琥珀色の瞳をしている。容姿でいえば超がつくほど可愛いと思うし、スタイルもいいよ。加えて笑顔が素敵な奴だ。性格は……」

ジエノ「なぜ言い淀むんだ。そこが一番大事でしょ」

朝霜「ま、いつも明るく笑っていて感情表現がストレートだったかな。けっこう無頓着で明け透けなところもあるから異性間の壁もあんまり作ってはいなかったかなあ。ただちよつと共産的な思想の持ち主だったけど長所でもあったな。みんなに分け与えてくれる」

朝霜「性格は欠点が思い浮かばねえほど」

可愛くてスタイル良くて非の打ちところがないほど性格も良い。フアンタジーか。

彼女はタシケントという子と深く観ていなかったのかもしれない。誰しも長所と欠点があるはずなのだ。軍艦ならけっこう数がいるはずだし、艦娘もそうなのなら関わりの薄い仲間がいても無理のないことなのかもしれない。

ジエノ「君は生き物が好きなの。バッグから凶鑑が見えるけど」

朝霜「まあ。種は問わずに。妖精は小人で羽が生えた可愛いで固定されていたけど、東洋じゃ怪物とか妖怪も該当するんだな、とか。なら管理妖精どものあんな風に怪物化したのもなんか納得したかも、とか、あたいなんで人間よりゴーレムのほうが近いな、とか」

ジエノ「もとが資材ならそうかもね。質問が一つある」

朝霜「有能かよ。一つで済むとか」

ジエノ「僕が君になにをしてあげられるんだ」

そういうと、朝霜はぼかんとした顔になって、その後、苦笑した。

朝霜「管理妖精は艦娘および深海棲艦を廃棄処分しようとしてつからな。中には管理妖精に牙向いて殺処分されるやつも出てくるだろうが、動機は様々だろ。かたき討ちもあるかもな。ただ管理妖精をぶっ潰す目的は同じのはずだ」

朝霜「船の部分を消し去る『人間改装設計図』がドロップするから」
朝霜「タシユケントを建造して効果紋を宿し、管理妖精をぶっ潰すの手伝ってくれ。あたいが鉄片化して建造過程で効果紋も宿すことは可能だけでも、あたいの経由じゃ大した効果紋は得られねえと思う。あたいは兵士としてもそう強いほうじゃねえし」

あのバカげた力で強いほうじゃないのか。人間改装設計図、というのも名前からして意味は伝わる。一度目は大戦時の船で戦い、二度目は艦娘として完敗を喫し、三度目の戦いである今回の最終章でエンドロールを流したいのは伝わる。

ジェノ「僕はケンカもしたことないし、見ての通り軟弱な男だ」

朝霜「あたいはメリツトの話をしてねえけど？」

ジェノ「春川のじいさんへの打算だよ。怒ると手がつけられなくなることもある。精神病棟行きの話も出てるんだ。そうなると更新時期に施設退去になるかもしれないけど、僕としては嫌なんだよ。借りを作っておくことであのじいさんが大人しく施設で過ごしてくれるのなら仕事はかどる」

残りを口の中に押し込んで咀嚼した。

レジで店員と柄の悪い男が揉めている。飲食店なら理不尽で暴力的な客は出禁にしてしまえばいいものの、介護は上が入所させたら世話をしなければならぬ。あの理不尽な男にクレームをつけさせない対応がケアとなる。

大事になる前にコントロールしなければならぬ。

6

自宅の平屋で大晦日を過ごして、紙切れを眺める。風水的な方角で保管している年末ジャンボの宝くじだ、大晦日は二千万分の一を夢見

て庶民の夢が溢れる日である。

せつかくの年末なので、大掃除でもしておくとした。要らないモノをかき集め、縁側から表へ出る。

「庭先の焼却炉に空色の鉄片と少量の紙を放り込んだ。」

朝霜「いや、お前さ、モノを燃やすついでに建造って」

ジエノ「ダメなの？」

朝霜「構わねえけど、トラウマもんだから覗かねえほうがいいよ」
冬の寒空に凍えて、燃える炎のそばで暖を取る。

ジエノ「つつかれたなあ」とため息をつく。

今年で23歳になったか。未来のことを考える。何十年も先まで働くのは億劫だな。毎年そう思う。意味もなくスマホを眺めていたら「ちよつと早いけど、あけましておめでとうございます」そんな通知がスマホに来た。気立て良く社交性もあり、可愛らしい子だ。

朝霜「誰？」横から画面をのぞき込んできた。

ジエノ「彼女……いや、もう友達みたいなもんか」

朝霜「大晦日だけど、会わないのか？」

ジエノ「東京にいるからね」

あけましてめでとう。僕もなんとか生きてるよ。と返しておいた。

子供の頃、お昼の短いドラマに出ていた子役の子で、女優の夢を追うといって都会に出て行った。そんな彼女は今やけっこう有名な女優で邦画のドラマにも出演するくらいだ。

いつの間にか有名人と付き合っていることになったけども、意外と大変だ。

パパラッチの記事を見た時は仕事が手に就かなかった。今はもう時間の問題だな、とも考えている。お互い、別れの話の切り出さなだけで、なあなあ、の関係だ。メディアの中で輝きを増し、段々と遠く、今では手の届かないあの空の星のよう。

ジエノ「もう冷めた遠距離恋愛も、年末の機に分別しておくかな」
そのほうが彼女の為になるんじゃないか、と素直に思った。なので思い切って、ただのファンに戻る、とそう連絡すると、「分かった！」と返事が来た。僕なりに真剣に考えたんだ、と送っても、それきり返

信はなしだ。こんな関係が延々と続いている。

強い言葉で伝えても、友達関係に戻り、いつもと変わらないこうした会話が繰り返り広げ、お互いがお互いをキープしているような状態が続くのだ。好きではないけど、嫌いでもない。それが別れる理由にはならない。なにか一つ決定打に欠けるのだろうか。上手く行っているのとは違う。

朝霜「なんだよ泉山。またあたいにケンカを売りにきたのか」

その朝霜のドスの利いた声で空を見上げるのをやめる。

門から一人の男が不法侵入してきている。見たことのない顔だ。中肉中背、身体のだの造形にも個性を感じず、特徴がないのが特徴のような男だった。

泉山「やつと見つけました。あなたとの話を伝えたら、相棒にこつぴどく叱られたんですよ。タシユケントは絶対に建造させてはならない、と。眉唾ものの戦闘力を語られました」男は苦笑いを浮かべ、「まだ信じられません。繁殖に成功したのは虫ですし、数が多いのは細菌で、全生物において最も生殺与奪の権利を獲得したのが人間。一世代の単一個体なんてたかが知れてますって」

口を開くと外見に反して個性的だ。

泉山「建造中、ですか。その一般人にしか見えない青年を建造主に？」

朝霜「ああ。あいつなら戦力になるよ。あの頃の性格のままなら……」

二人の視線が焼却炉に向けられた。

つられてジエノも目を向ける。

焼却炉の中で、琥珀色の瞳と目が合った。

轟々と燃え盛る炎の様子を伺う。

資材がドロドロと融解し、なにか形を作っていた。思わず目をぱちくりする。炎の中で燃える琥珀色の瞳が、こちらをじいっと見つめていた。揺らめく炎の幻想ではない。その瞳から感じるのは背筋を撫でていく極寒の怖気だ。

ジエノ「人が中にいる！」

パニックを起こしたジエノが取った行動は、春川のジイさんが転倒しかけた時と同じだった。無意識に助けようとした。伸ばした手がガシッとつかまれ、左手に鋭い熱が走る。反射的に手を振り払い、引っこ抜いた。

チリチリとした火花と、

「――誰かな」

氷を思わせるような冷えた声とともに、

「三度目の開戦にあたしを呼びやがったのは」

空色の少女が、焔から現れた。

?-13話

タシユケント「ようやく星になったはずだったのに！」
その場にうずくまり、頭を抱える。

タシユケント「終わりを迎えたはずなのに！」

疑問が多すぎて、逆に言葉に詰まる。焼却炉に人がいたのか。いや、そんな馬鹿な。彼女は火傷しているようには見えない。本当に建造とかいう行程で人が産まれた。

タシユケント「三度目の開戦……！」

両手で顔を覆う。

朝霜「タシユケント！」

朝霜の声をかき消すように、鼓膜を切り裂くような爆音が鳴る。

ジエノ「あ、このうるさいバイクの音は……」

大晦日の今日に暴走族が暴走しているようだ。このバイパスを通り抜けていくのだろう。時計を確認する。ちょうど日付変更時の午前零時だ。改造された暴走車のマフラー音が近づいてくる。

タシユケント「うるさいなあ……」

彼女は柵を軽い動作で跳躍し、向こうの鋼業社の敷地へと入った。キイが入ったままの二トントラックの運転席へと乗り込んだ。

トラックが加速していく。

運転席には可愛い顔達をしている彼女がいた。改めてみると、中性的で性別の判断に迷ったが、長い茶髪からして女性のような。歳の頃は十代にしか見えない。

今のこの状況、疑問しか湧かないが、なにより印象的なのは、

——あっはっは！

満天の星空を見つめながら、一点の曇りもない満面の笑みを浮かべていることだ。少女はハンドルを切らずに目前の公道に頭から突っ込んでいく。誰かが制止の声を出したが、車は止まらない。暴走族はすぐそこまで来ている。

「止まれ！」暴走族かな。そんな大声が聞こえた次の瞬間だ。

トラックの車体に高速で突っ込んだバイクの車体と人間の体が、立

て続けに宙を舞った。喧騒が静寂に包まれ、対向車線を走り抜けてゆく車の音と、後続車の急ブレーキの音が聞こえる。

空色の少女は運転席から降りてきた。まだ浮かべている笑顔にもはや狂気しか感じない。暴走族の青年の一人が起き上がろうとしていた。さすが元気がありあまつているだけあつて丈夫。

タシユケント「つくづく思うよ」

ブーツの靴底でその少年の頭を足蹴にした。現場は騒然だ。スリップしたのは四車だが、一人が重傷なのか、ぐったりとしている。周りの仲間がスマホで警察と救急車を呼んでいた。

タシユケント「こんな連中を守る為に生を賭したの……か」

身体を丸めて少年たちは、背中を丸め、瞳孔が開き、飛び出した黒い目玉といい、陸に転がったエビのようだ。なんだろう、心底、意味が分からない時つて、頭も体も思うように動かないものなんだな。今の自分も目を見開いて、立ちながら呆然としている。

タシユケント「粛清に例外なし」

頭蓋骨が砕ける音を始めて聞いた。頭を踏んでいるブーツの底が地面についた。

タシユケント「世のため、平等に殺す。君達みたいな犯罪者が清廉潔白に生きる者より幸福になることは許されない、というより、癪なんだよ」

サイレンの音がする。パトカーがやってくるのだ、と思うと安堵で思考が回るようになる。

民家から頭一つ抜けた警察署に視線を移した。いつもは煩わしいだけのサイレンの騒音も今や救いの音色だ。理想的な流れはこれ以上の被害を受けず、この少女が警官に捕まること。

タシユケント「無駄にこの身体は性能がいいや」

タシユケント「遠くから世界で一番反吐が出る愛の歌が聴こえる」

タシユケント「あなたがいたから」

タシユケント「あなたのおかげで」

タシユケント「あなたがいなければ」

タシユケント「なんて自虐風自慢の歌だ」

そんなつぶやきの後、「こつちにはあなたなんかいた試しもないんだよ、独りで苦しみながら生き抜いたあたしのほうが……」

タシユケント「裁き」

少女のまくれた服の袖から、水色のスライムのようなものがグジュグジュと蠢いて、奇妙な形を創った。長方形の箱に細長い銃身のようにななにかがついたモノだ。次の瞬間には轟音、その小さな砲塔のような筒からは煙があがっている。

遠くにある警察署、国家権力の建物が吹き飛んだ。

2

驚いたのは、彼女が下した自称裁きの破壊が完全に修復されたことだった。

まるで何事もなかったかのように、暴走族は行動を駆け抜けていき、パトカーの音がその騒音を追いかける。遠くの瓦礫の山となった警察署は健在している。夢か現かの判断ができない。

朝霜「この世界で世話になってるよそ者の身だぞ。建造そうそうなにしてくれてんだ」

朝霜「手前なら原理を知っているはずだろ。この力の根源は」

タシユケント「星の命だろ。誰よりも手品の種は把握してる」

タシユケント「星の寿命と引き換えの現実の書き換え能力、そんなことより」

タシユケント「あたしの建造主はどっちの彼だっけ？」

あの惨劇を見せつけられた後に名乗り出る勇氣はない。

彼女の視線が向いたのは泉山という男のほうだ。

タシユケント「無関係な人には書き換え作動だし、死んだほうが当たりか」

朝霜「させるか！」

不意打ちで襲った朝霜の拳をなんなく止めたぞ。

タシユケント「効果紋がある程度で」

続いて泉山が左のジャブを放つ。

泉山「あ……」

タシユケントの全身が流れるような動作を始める。一撃、二撃、ボクシングの攻撃動作と比べると、直線的な動きがほとんどない。タシユケントの拳がピンボールのように自然に跳ね、攻撃している。ハイキックが朝霜の側頭部に直撃だ。あれ、システムじゃないのか。タシユケント「うん？ 虹色の効果紋？」

泉山の右腕がゴリラのように毛深く、太くなった。タシユケントの首をつかむと、今度はワニのような頭で豪快に噛みついた。その歯が彼女の首に食い込んだ時、ジェノは目を覆い隠した。

泉山「なんとか」

その声が聞こえた時、恐る恐る両手をどける。

胴体から噛み千切られた彼女の首が地面の上にある。

ふう、と泉山と朝霜は胸を撫で下ろしている。

この二人もなんなんだよ。今の一連の騒動、地面の上でさらされてる生首を見て、安堵できる要素がジェノには全くなかった。目を白黒させるだけの光景の連続でも朝霜と泉山という男に取り乱した様子はない。

タシユケント「なんか君、殺し方が豪快な割に手慣れているね」

生首の彼女が微笑んだ。

泉山の次は速く、大きな一歩で跳躍し、なにかの動物の足で生首を踏みつける。その後すぐにガキン、と金属音がした。彼女の胴体が起き上がり、右腕からすうつと空色の金属の刃が伸びていた。その刃を阻んでいるのは、鉄の塊の化物だ。

攻撃を仕掛けた彼女は、溶鉱炉の中の時と同じく、首が再び形成されてゆく。完全に頭部を取り戻した彼女は「深海日棲姫の艦装か」その鉄の塊に備わる砲塔のほうをじいっと見ながら、右腕を空に向かってすうつと伸ばす。

泉山「あなた、本当に艦娘ですか？」

タシユケント「君、昔は猿だったって本当かい？」

泉山「私に限り、違うと思いますよ」

泉山の放った蹴りが、タシユケントの細い首に直撃した。血しぶき

が舞い、大きな骨が折れる鈍い音が確かにこの耳まで届いた。タシユケントの体は、水面を跳ねる平石のように地面の上を転がって、石垣の壁に衝突する。今までの威力とは桁が違う暴力だった。

泉山「怪物ですね……」

忌々しそうに舌打ちをかます。

この人に怪物とかいわれちゃうとかよっぽどだけでも、実際あのタシユケントの異常性は一目瞭然だった。文字通り、頭部は首の皮一枚でつながっている。首から血を噴きだして、脛骨が直にこんにちわしているが、声を発し、笑う。

ジェノ「水色。赤、そして黒？」

タシユケントの身体から流れる赤い血とは別に、空色の液体と、その赤と空色が濃厚に混ざり合い、夜空のような黒色になっている。それらの液体が混ざり合い、タシユケントの肉を接合していく。朝霜が「いつ見ても頭おかしいよな。入渠とか高速修復材の回復効果の域を出てるよ」項垂れてそういった。

ジェノ「僕は腰が抜けているんだけど、君は加勢しないのか」

朝霜「裏切り認定されたらと思うと、怖えよ……」

泉山はタシユケントに向かって、門数の異なる主砲塔を一斉掃射した。土埃と粉と化したコンクリが突風によって霧のように舞う。

泉山「死んでない、と」

空色のスライムがタシユケントの右腕にグジュグジュと蠢いている。弓、ナイフ、鎌、様々な武器に形態を変化させ、固形化している。狩りに使いそうな得物ばかりだ。

気になるのは、先ほどから空に向かって突き出した左手から空色の鉄の支柱がすうっと如意棒のように夜空に向かって伸びていることだ。意味もなくあんな真似をしているとは思えない。

泉山「実質、砲撃が効かないのですか……」

タシユケント「砲撃ってさっきの豆鉄砲のことか」

彼女が右腕をトリガーのように引いた。

タシユケント「孤独に研ぎ澄ました星の砲撃を見せてあげよう！」
あ、と思わず声が漏れた。

あれは少なくとも一万センチはある。

夜空を割ったのは巨大な鉱物の塊だ。対処不可レベルな突然さを考慮すると、砲撃ではない。

星が降り注ぐ災害——隕石。

あまりのスケールに声も出なくなつた。彼女は「星になれ」といつて笑う。

やらない、といえるか？ いえない。

彼女は本当にこの世界を破壊するつもりだ。

朝霜「溶鉱炉内臓後期型成功作と戦つて勝てるわけねえとは知つてたし、殺されても鉄片になるだけで死にはしねえから。その鉄片が木っ端みじんになつたら死ぬけどさ」

ジェノ「殺されても死なないことが傷ついて良い理由にはならないと思う」

ジェノ「僕はまだ死にたくないし、あきらめたくはないよ」

朝霜「ならタシケントを介護してやってくれ」

ジェノ「ねえ！ なんでもするから助けてくれ！」

タシケント「イヤ」

声かけ失敗。

ジェノ「あ、これ……」

左手の甲に文字が浮かびかけている。あの泉山という男のような力、朝霜との会話を思い出すと、効果紋というやつなのだろうか。どうしたら使えるんだ？

そう頭を悩ましたところで、頭の中で弾けるような衝撃が生まれる。一瞬、視界がブラックアウトする。左手に生ぬるい熱を感じる。ぼたぼたと鼻血が垂れていた。「分かる」とジェノはぼそつと呟く。未知の知識がインストールされたかのようにだった。

空から文明即死級の範囲攻撃が降ってきている。

タシケントの体に黒いエフェクトがかかる。

タシケント「——へ？」

素で驚いた彼女の顔は造形通りに可愛げがある。

空の災害が雲散霧消し、

朝霜「いたっ」

こつつと彼女の頭上に空色の小石が落ちた。

*

「御覧の通り、本物を資材に混ぜると建造結果を狙い撃ちが出来ますよ」

「溶鉱炉。ここから艦娘も深海棲艦も制御できる。艦娘は資材を溶鉱炉に放り投げて建造するでしょう。艦娘はドロドロの状態ですでに生命としての存在は成立している。人間の形をしているのは、すでに『改造』されているから、というのが真実です」

喋り相手のお偉いさんの位はよく知らない。

この説明は初見の相手には必ず行う。要は、人間じゃないんですよ、との念押しだ。

人の形をしていることなので非人道的だという輩がまだまだ数多く存在する。一時期の政権が人権を付与したが、燦々たる結果といってもいい。こいつらが前世で与えた苦痛だの歴史だのといって他国からの外交圧迫が続き、しまいには、解体しろ、などというのは海で戦っている最中では妄言もいとところだ。

そういうのは戦いが終わってからだ。

「複数の軍艦の一部を資材として投げ入れたら。深海棲艦を解体して得た資材を投げこんだら。人間や妖精を資材としたらどうなる。妖精や深海棲艦は改造できるのか。偶然の産物である融合炉後期型は深海棲艦でも適合するだろうか」

素朴な疑問は真っ先に試された。

様々な試行錯誤を積み重ねた。政府がこれらに対しての扱いを早急に、といいつつ、予定を遅らせていたのは面倒な規定を決定する前に研究結果を出す為、といえはいいのだが、結果的には良い方向に転んだ。

この娘どもはどちらかといえば軍艦だ。

軍艦に人間の体を『ENCHANT』されている。

そちらを基礎に仕上げられているために強力なのだ。昨今は人間も様々な無機物を体に埋め込むが、ここまでの完成度は神の叡智に触れたといってもいい。

「設定される基本値——ステイタスの過程を弄る技術を発見しました。人間で例えるのなら先天的な才能ですかね。近代化改修は生産を終えた後の努力に過ぎず、生産した直後から莫大な数値を設定しておけばいいだけ。この技術はリクエストを実現し——」

「後天的に兵士を強化する『人間』のみが扱える力となります」

つくり方が違うだけで、遺伝子構造は人間と同じだった。つまり、この炉の研究が進めば最低でも、人間の身体でもこの娘どもと同レベルまで強化してゆける。人間と改造される過程、ドロドロの構成過程の途中、人間は『そこ』へ近づける。

その結果、神の意表を突き、効果紋の力となるのだ。

「建造途中ですが、ほら、人体が形成されかけているでしょう。一旦、止めましょう。間違ってもこの行為を中絶だなんて例えてはなりませんよ。さあ、彼女の兵士性能、人間としての基盤が出来上がったところで、建造中止しました。ほらこの時です——」

「決して溶鉱炉は除きこまないでください。顔は見ないでください。あえての例えですが、母親の腹の中で感情や知識を手にし、中絶される赤ん坊の表情こそ恐ろしいものはありません。さあ、溶鉱炉の中へその手を入れてください。彼女の魂の形が、あなたの個性と同期し、大まかに分けたタイプのいずれかとして刻まれます」

船と人が結合合成されるその時、人間が介入する余地が出てくる。彼女達の船の力の源泉がそこに新規に投げ入れた人間という資材にも流出し、影響する。タイミングを過ぎてしまえばその手が持つていかれてしまうが、幸い「熱っ」と人間は勝手に手を引っ込める。

提督の左手の甲に焼かれたのはB U F Fの文字があつた。基礎ステイタスを上方修正する力だ。「倍率にもよりますが、駆逐でも姫鬼の装甲を一撃で碎けますよ」

はいずるように炉の中から実験体が出てくる。タシユケントがちょうど建造完了した。

「タシユケント、ちょうど良い。中佐殿の相手をしてやってくれ」

タシユケント「うん……」気は進まないようだ。

そうしていつものチュートリアルが始まる。春川は実験結果を記録しながら、片手間で書類を片付け始める。中佐殿はタシユケントと互角に近接戦闘をやっている。バフの力は人間に影響を及ぼすもので、人間から艦娘へ、の他にも、人間から人間へ、人間から深海棲艦へ、の影響が可能であり、艦娘や深海棲艦では効果紋を宿せない。人間専用武装だ。

「馴染むの早いですね。効果紋は艦の娘どもが外付けの艦装を手足のように扱う感覚と同じなはずですよ」

中佐は身体能力が同じであれば、技量的に土台のある自分が有利であることを把握したのか、タシユケントをねじ伏せた。満足そうだった。

言ってしまうえば作戦なんか別に人間じゃなくても立てられる。それしかできることのない人間のマウンテイングに過ぎないのだ。力関係的に彼の面子の問題もあつたが、それは効果紋が払拭したといってもいい。

「ご苦労さん。あの中佐の満足そうな顔を見たかよ」

軍人が去った後、春川はそういった。

タシユケント「同志は守られていたばかりだったから、気持ちは分かるよ」

対等以上になったからには、タシユケントはもう人間を超越した存在ではなく、普通の娘といつても過言ではないが、あの嬉々としての暴力の振るいようだ。結局のところ、人間は心のどこかで艦の娘どもを差別している証拠といえた。

「つうかお前もお前だよな。俺を殺したくならねえのか」

よく耐えている。姉妹艦の存在する兵士だと色々と厄介になる。タシユケントは建造されてからずっとその存在を公表されているものの、艦の娘との交流は微々たるものだ。道具に近かった。

タシユケント「先生は道を作っている。暁の水平線への近道だ」

よくやるよ。艦娘にも痛覚はある。これまで様々な悪逆非道をこ

の少女に施した。殺されても復活する彼女を生きたまま炉に放り込んだこともあったし、彼女が「行くところのない友達だ」といつて鹵獲してきた深海棲艦もモルモットにした。

深海棲艦は艦の娘の鉄片、核が深海に沈む影響によって存在が確立される。艦装を艦の娘よりも体の一部とする彼らは艦装を喰らうことで、身体が強化されることも知った。つまり深海棲艦はもともと建造された艦娘から変化するもので、炉を再び経由しない。

まさか深海棲艦が強くなるためならば、仲間の死肉を嬉々として延々喰らうほどの生物だとは思わなかったし、軽蔑したものだ、タシケントが悲しそうに眼を伏せたのを覚えている。

「俺は他の提督みてえにお前らを好きにはなれねえわ」

タシケント「あたしは良い反面教師を観ているからね」

タシケント「決して憎まないし、決してあなたのような大人にはならない」

タシケント「なにをされたって、気強く生きてゆく」

恐らく失敗すればタシケントに殺される。その時、その覚悟を持ち、研究に望んだ。別に死は怖くない。感情的に自分は殺されても文句はいえる立場ではない、と納得していた。それでも艦娘は良いやつらばかりだから、すぐに人間を許すはずだ。被害者のほうから差し出された友好の手を加害者がつかまぬ理由も特にない。

タシケント「戦いが終わればきつとみんなもあたしもその功績を認められて、報われるはずだ。みんなが仲睦まじく過ごしている時間も鎮守府の縛りから解放される」

夢見ているのは、人並みの当然だ。

隣の芝が青く見えるんだろうな。

タシケント「いつかきつと」

真つすぐな瞳をしてそんなことをいわれても、春川はすでに炉の虜であった。

そういうのはすでに副産物だった。

深海棲艦のいない海への景色は、効果紋が明け透けにした。もはや奴らとの決着は時間の問題といってもいい。

ただ春川は違うタシユケントとは違う景色を見ていた。

「嬢ちゃん、最強に興味あるか」

春川はすでに次段階の構想に着手している。効果紋はあくまで艦娘の力を人間に流し込むものに過ぎず、そこで生まれた艦の娘どもはその力の申し子といえる。

艦装は建造炉から生まれる。艦娘に付随する全ての性能は炉が発端だ。例えばややこしいヒールの仕組みも、入渠システムと同じ原理が作用しているのも判明した。数値の上げ下げをするバフデバフも、人間を付与するエンチャントも炉の力といってもいい。

その炉を丸ごと艦娘に取り込みまおうという発想を煮詰めた強化研究だった。

この研究が完成し、上手く行けば、一か月後には暁の水平線が拝める。

そして成功、したのだ。一年後だった。

予想はしていたが、戦況に大きな変化はなかった。すでに効果紋が猛威を振るい、残る深海棲艦の勢力は100にも満たなかったからだ。それでもタシユケントのお披露目は通った。初めての抜錨し、戦闘報告を聞いたが、その力は次元が違った。

建造炉内臓型艦装、深海棲艦の艦装と肉体の融合現象を利用した結果だ。エンチャントは無理だったが、理論上のバフ、ヒールを扱え、資材すら内臓しておける彼女は文字通り最強だった。

世間が騒ぐ中、春川は新たな炉の可能性を発見していた。

建造炉内臓型を完成させた時、質量変化も可能にした。もともと建造する資材の重量に対して建造される艦の娘は極めて軽量だったのだ、その論理を使用した。

まあ、そうだよな。物理法則が捻じ曲げる炉の中は特異点といってもいい。

プログラムされたゲームの世界、彼等は客観的に命と呼ばれてはいないものの、プログラムすることにより、命を持った生物達のゲームの世界を構築できるのではないか。この炉の技術の先に、人間は神話の所業に手が届く。

「今なら」と春川に新たなる野心が芽生える。

今の解明レベルなら、

別世界の存在の有無を立証できるのではないか。

——そこが我々の観察限界ですよ。

「あん？」そんな声が聞こえた。そこにいる二等身の妖精の制止の声が聞こえた気がしたが、いつもと変わらない。固定された笑みを浮かべているだけだ。

タシケントの笑顔とよく似ているな、と思った。

*

ジェノ「う、今の春川のじいさんと君か？」

唐突に映像や心情が流れ込んできた。頭痛に襲われ、同時に吐き気を催す。

タシケント「桜、色——」

まばゆい輝きが下方から発されている。視線を落とすと、左手の甲が桜色に輝いていた。『S』の英文字が見えたけども、字体がぶれるように変化する。

やがて【DEBUFF】の文字の羅列に落ち着いた。そのままの意味通りなら弱体化の効果なのだろう。

だとしたら、さっきの映像は一体、なんなんだ。それにさっきと文字が違う。デバフにSの文字は見当たらない。その文字列を見つめていると、朝霜が「効果紋は、あたいらが建造時点で艤装を使えるのと同じだよ」とのよく分からない説明をした。

朝霜「文字列が消えたり、現れたりしてるうえ、記号まで見えた。効果紋の烙印に時間がかかり過ぎてるぞ。あたかも初めてみる現象でなにがなんだか分からねえけど」

泉山「文字列が消えたり現れたりしていますね。私の時は数秒で烙印されたのですが、これはあれじゃないですか。あなた達も建造時間は個々にズレがあるんでしよう」

異常は視界にまで広がっている。

夕雲型16番艦朝霜とか、練度80とか、だ。朝霜の姿を眼で捉えた時、彼女の名前とよく分からない指数が数字として出ている。その隣の泉山の数値はなにも表示されていない。既存の知識にあてはめると、名前とレベルだよな。

ジェノ「名前と、練度」

泉山「ああ、映っているのは名前と、熟練の度合いを示す練度」

タシユケント「頭が」

彼女は先ほどから頭痛がするのか頭を抱えうめいていた。口元から涎が地面に糸を引いている。

彼女の数値は朝霜とは次元が違う。

『タシユケント級一番艦駆逐艦タシユケント』

『練度400』

説明の通りなら熟練の度合いは朝霜の5倍もある。

ジェノ「タシユケントの練度400だ」

ジェノ「君は確か彼女の性格は非の打ちどころがないっていったはずだよな。本当に彼女で合ってるの……？」

朝霜「限界突破すぎ」

目を見開く。そのリアクションからして、彼女の予想外だったのだろう。

朝霜「あたいが知っているタシユケントの練度は150辺りだったぞ。こいつは最後まで人の為にその能力を捧げていた兵士だった」

朝霜「おい、タシユケント」彼女のほうに目をやると、恐る恐るといった風に訊ねた。「この練度、溶鉱炉内臓後期型の手前ならあり得ねえ数値ではないけど、あまりにも時間がかかりすぎる」

朝霜「手前、あの終わった世界でどのくらい生きてたんだ……？」
タシユケントは答えず、四肢を地面に突き立て、起き上がってくる。

ただその上げた面の、とてもかつての仲間に向けられるものではない鋭い怒りの眼光で物語っていた。

朝霜「その目はなんだよ。建造されたんだから基本知識はインストールされてんだろうが」

朝霜「管理妖精をブツ倒してドロップする人間改装設計図があれ

ば、溶鉱炉内臓型も解体できるんだ。この意味の事の大きさが理解できない手前じゃねえはずだ。大勢の仲間を失っちまった。使命は果たせず人は滅んだけど、クソみてえな輪廻から解放される」

つらつらと述べる彼女には溢れ出る感情が、声や動かした両手の仕事から感じ取れる。

タシユケント「その夢はどこを見た」

タシユケント「その希望は誰と見た」

タシユケント「いつも未来はあたし達を置き去りにする」

眼光の鋭さは変わらないままだった。

朝霜「いいてえことは分かる。あたいだって割り切れているわけじゃねえけど、生き残りつちまったなら、進むしかねえよ。夕雲型のみんなはあたいがここで死ぬことを望んでいるわけがねえってのはわかんだよ。みんなでお手々つないでゴール思想はやめろ」

タシユケント「イヤだ！ みんなで死のう！」

タシユケント「残念ながらそれが最善だ。この話は終わり」

冗談でいつているようには見えず、シャツトダウンするような切り方だ。

朝霜「終わらねえよ」

タシユケント「最初は、深海棲艦と戦っていた時のあたし達はうまくやっていたんだ。でも炉で生まれるあたし達はこの形になっても、生物学的に人間倫理的に人との溝は埋まらなかった。上官が、提督が、あたし達にかけた温かい言葉の全てが張りぼての嘘だった」

また顔を覆う。情緒不安定の極みだ。今度は涙腺を潤ませ、声を震わせている。

タシユケント「戦況が悪くなるほど、その扱いも比例して悪化していった」

タシユケント「いくらやつても勝てないから、更に重い訓練を課したの。クリアしないと罰を受ける。今日も良い子にして、あたし達は命を賭けて時間を作り続けた。あの女、あろうことか、その時間でも倫相手と逢引してた。大破し、敗北したあたしにいった」

タシユケント「『子供も産めない女ってだけで国益を損なう存在な

んだから』」

タシユケント「『容姿が優れている分、女としては詐欺よね』」

タシユケント「ひどすぎるよ。あんまりだ」

指の隙間から大粒の涙を零し始める。

その悲哀の深度こそ察せずとも、彼女が本気で泣いていることは人の感情を探る仕事をしているジェノにはなんとなく分かったのだ。それに虐げられたという点では少しだけ自分の過去と被る部分もあったし、こうなるともう『僕は君になにをしてあげられる』の心理状態だった。いや、本当になにをしてあげられるんだ。

ジェノ「か、管理妖精を倒そう」

朝霜「待て。いつてなかったけど、こいつに嘘をつくとは怖いぞ」

タシユケント「もう遅いよ。言質を取った。その超倍率のデバフさえあれば可能性はある」

けろつと泣き止んで笑顔になってる。

ジェノ「本気で泣いてたよね。感情の切り替えが神がかり的だ……」

タシユケント「本気で泣いてたよ。じゃ、これは？」すぐさま顔を両手で覆うと、「にこっー」と声を発して、再び笑顔になった。

ジェノ「それは誰でも作り笑いだと思うけどな。本気の感情の伴う表情っていうのは声や仕草が伴うんだ。声にも仕草にも、表情があるから」思ったことをいう。

タシユケント「あたしの名前はタシユケント。イタリア生まれのソ連艦だ」

ジェノ「僕はイタリア生まれの日本人の寒河江ジェノだ。弁護士やってる」

タシユケント「弁護士君、嘘をつけばその首を革命の鎌で刎ねるよ」

タシユケント「行こう。本当の絶望に殺されに行く」

タシユケント「勇者と自殺志願者は似て非なるもの」

タシユケント「されど紙一重なんだよね」

腕を引っ張られる。デバフの効果が効いているのか、そこまで力がなかったが、それでもジェノよりも力があり、押し敗ける。

逃げろ、と頭が警鐘を鳴らしている。今ついていったらひどい目に遭う。

強引に焼却炉の中に投げこまれる。

まさか家の焼却炉から異世界に行けるのか？

?-4話

ジエノ「みんな、いなくなった」

眼前の景色には誰もいない。車の音一つすら聞こえない。

寂れた街だ。確かに見えるビル群も、人気がないとまるで墓場のようだ。あつたはずの景色が差し替えられたかのように間違えばかり。今いる場所はなにかの施設の廃墟だろうか。

宿舎のような棟もあれば、倉庫のような場所、スクラップが積み重ねた工場のような場所まで見える。乾いた風に乗って届いた潮の香りに振り向いた。半壊した壁の向こうには海があった。

ポケットからスマホを取り出し、辺りをライトで照らし上げる。

空間の壁や地面びっしりに正の字が刻んであった。

ちらりと地面のほうを見る。

タシユケントがいた。やっぱり夢ではないか。何度、確認しても、さきほどまでもにいた少女と瓜二つだ。

ジエノ「朝霜……タシユケント」

調べた限りは艦船の名だった。思えばあのコンパクトな武装は軍艦をコンパクトにしたような形状をしている。

タシユケント「誰もいない世界を救おうとする君の気概に免じて」
タシユケント「今回限り、指揮を執ることを許そう」

空色の鉄が体から伸縮自在に動かしている。枝のように金属が伸び、鞭のようになり、鉄のように硬化し、刃や盾に変化させているどころか、アンカーのように壁に打ち込んで、壁の側面に立った。身体の動かし方を見て、人間の運動能力を超えているのが分かる。

タシユケント「教えるよ。溶鉱炉内臓前期型はまとった資材を艦装にしか変化させられない。艦装を身につけるという過程を短縮し、持ち運びを簡単にしたものだ。後期型は何人かいるけど、あたしが唯一の成功例で、炉の本懐である建造開発を個でできる」

部屋を見渡した。刻まれた正の字から連想するのは彼女の生きた年数だ。廊下まで続いているし、ざっと見ただけでも10年以上は固い。「道理で」まさか誰もいない世界で戦い続けていたのか？

タシユケント「八十年」

一人の人生の時間で性能を研ぎ澄ましても、その敵には届かなかったという。

ジエノ「その溶鉱炉内臓型の代償が解体という人間となる行為で……」

ジエノ「だから管理妖精が持つ人間改装設計図が君達には必要と」
タシユケント「その管理妖精があたしよりずっと強かった」

事態を飲み込めたとはいいづらけれども、彼女の目的は分かった。だから、この効果紋を活用し、管理妖精を倒そう、と持ちかけてきたわけか。

ジエノ「要は君は普通の人間になりたい訳だね」

タシユケント「あたしは別に」

唇の端を釣り上げた。嘲笑ではなく失笑に見える。

タシユケント「朝霜君が来ないだろ？」

普通に考えて来ないよな。そこまで朝霜と仲良くなった覚えはなく、責める気はない。

タシユケント「死にたくないからだよ。あたし達は長生きしてる。その全てが報われていないうえ、20歳そこらの君の知っている幸せのほとんどを実感したことがない。精々が仲間への感情だろうね」

タシユケント「報われるという意味で解放されたいんだよ。人間になりたい訳じゃない」

タシユケント「あの管理妖精はいった」

タシユケント「効果紋はバフ、デバフ、ヒール、エンチャントの他にもう一つ種類があると。セイヴィア、救世の紋だ。君のは間違いない。デバフではあるけれども、少なくともあたしの隕石砲を石ころに変える超倍率であることだけは間違いないから」

タシユケント「挑む価値はある」

そういう割には本気を感じない。殺されても鉄片化するだけだからだろうか。その鉄片を破壊されない限り、建造という手段で何度でも蘇る。彼女に関しては恐るべき再生能力まである。

最も死ぬ可能性が高いのは僕じゃないのか。

タシユケント「あたしが愛想を尽かされたのなら矛と盾を同時に失い、君は奴に殺されるだろう」

タシユケント「効果紋は個々によつて大まかに四つの種類に分類される。デバフを宿す人間は正直、あまり良い性格をしていた例をあたしは知らない。陰気なやつばかりだ」

ジェノ「それは当てはまるって一目で分かるはずだ」

彼女は笑つて「そうだね」と同意した。初対面の人からよくダウナー系だよ、といわれる。明るい性格をしていないのは自覚している。そこと天然パーマがコンプレックスだ。

気持ちを整えるため、革の破けたソファに座つて、廃墟のような雑居ビルの一室のテレビのスイッチを入れる。情報を得ようとする習慣だ。テレビは映つてドラマでもお笑いでもなんでもいい。なにか見知つた映像が流れるのかな、と思つた。

——戦闘開始。

視界にそんな文字が浮かびあがる。なんだこれ。右目の視界だけ奇妙なことに、ゲーム画面を見ているかのようなキャラステイタスが表示されている。タシユケント、だろう。彼女を二次元絵にしたかのようなデザインで、隣に火力や装甲、耐久値といった数字が並んでいる。火力は66、耐久は39、装甲は56だ。

タシユケント「出撃するよ」

タシユケント「これからはずっと、自分の意思でね」

2

タシユケントの水色の腕がうごめき、兵装を象つた。現実でも夢でも見た艷装だ。

エマーージェンシーコール。警報音が鳴り、右目に映る地図上の一点に赤い点滅が発生した。あれが敵なのか。どんなやつなのか。

ジェノ「ああ、これはすごい……」陳腐な感想しか出てこない。

実物の軍艦よりでないか、と思うサイズの神話の生物がいる。対峙しているタシユケントは蟻のように小さく見える。

タシユケント《【ENCANT・Doragon】だ》

ジェノ「なんで遠くの君の声が届くんだよ」

タシユケント《生憎とこっちの技術的な説明を長々とするのは後だよ。しばらく見ていないうちに技術が発展してるのは妖精達が舞台を整えていたからだとは思うけども》

タシユケントが手に持った砲を撃つが、効いているようには見えない。実際、画面に映る敵の耐久数値は1も減っていない。タシユケントの砲撃が弱いのではない。画面越しでも殺人的な威力だと伝わる。あのドラゴンの鱗が丈夫すぎるのだ。

【ENCANT・Doragon】

ジェノ「火力、装甲、耐久数値全て9千以上だ。勝てると思えないんだけど」

タシユケント《実際、勝てずに終わった。管理妖精は別に生への執着もない、ただ楽しければそれで満足するはずなんだ》

ジェノ「よくわかんないけど、なんか妖精らしく無邪気な感じか」
タシユケントの数値と見比べたら天と地の差といってもいい。
とりあえず、深呼吸する。

あいつがどうやって海に浮いているのか、や、なんでドラゴンなんかいるんだ、という疑問は全て置いておく。異世界。この一言ですべて解決する程度のことだ、うん。

ジェノ「命を賭ける価値はあると思う」

ジェノ「このファンタジーの為なら死をベッドする人間なんてきつと腐るほどいるよ」

ジェノ「つまり、僕は君達の輪の中では替えの利く存在に過ぎないんだと思う」

タシユケント《その通り。冷静だね》

タシユケントの砲撃は意味を成していない。

的が本来の軍艦サイズの場合の砲撃威力なぞ知らないが、あの竜はまるで周りを舞う羽虫を目で追っているだけだ。まともに相手されていないような気がする。彼女の砲撃の一つの威力は人間程度なら一撃で木っ端微塵のはずだが、まるで効いていない。

タシユケント《勝負にならないから、デバフをかけてよ》

意識的に映像に映るドラゴンに向かって効果紋の力を使ってみる。瞬間、ドラゴンにエフェクトがかかり、ステータスダウンの文字が浮き出る。画面に出ている戦闘力が低下してゆく。タシユケントの機装が液体化して、右腕にまとわりつく。右腕の空色のスライムが蠢き、身の丈の何倍もある鎌のような刃に化ける。

ジエノ「軍艦の武器なのそれ……？」

タシユケント《灼け力だからね。機装形態から鉄をこねて形状を変えられる。あたしにだって考える頭があるんだからただ舵を取られるだけじゃただの無能だよ》

その鎌の刃で竜のどてっばらを狙った。ちょうど黒いエフェクトが一層濃くかかっている個所だ。タシユケントの刃は竜の腹に深く食い込んだ。半分だけ空いていた竜の瞼がカツと見開かれる。竜だけあって瞳は爬虫類の模様と似ている。

地面が激しく揺れた。

遠くの竜の咆哮が鼓膜を切り裂くように、直に耳に届く。空間を制圧するほどの圧倒的な存在感に、外敵と認識された直後、野性的な動作で長い尾を海面に平行に滑らせる。

——逃げられない。

尾を振るだけで、タシユケントのいる周辺を丸ごと薙ぎ払う範囲攻撃だった。触れた瞬間、木っ端みじんに砕け散ると確信させる迫力がある。

しかし、直撃してもタシユケントの体はバラけなかった。ばらばらになった手足を水色の液体で繋いでいる。すぐに損傷した身体が服ごと元通りの形を取り戻す。

タシユケント《今の復活は何度も期待しないでくれ。内臓資材的に疑似女神発動はもう終わりだから、次は殺されると思うよ。資材が足りない》

ジエノ「どうしたいんだよってのは愚問か……」

タシユケント《全力で攻撃するタイミングを模索してはいる》

ジエノ「どうすれば倒せるんだよ。デバフ使ったし、他に出来るこ

とあるのか」

タシユケント《君こそ全力を出してくれ、倍率があたしにかけた時よりも低いよ。歴史でも戦いにすらならなくて弱点が発見されている訳でもない。核でも倒せなかったどころか、結果的には人類絶滅だけど、あたしと君なら倒せるかもしれないだろ》

ジェノ「でも、生物ならそうだな、頭部にかけるのが鉄板かな」

「シンプルな作戦会議を終えたと同時に、タシユケントのすぐ隣を解体の鉄球のような巨大な砲弾が飛んできた。なぜか、その砲弾は赤く燃えている。竜の口から吐き出されたように見えた。《熱っっ！》炎がタシユケントの体にまとわりつく。画面の数値でタシユケントの全てのステータスがゆっくりと確実に低下していく。

ジェノ「これ、スリップダメージか……」

タシユケント《エンチャントの効果紋の力を持ったドラゴンと考えればいい。あの炎は水で鎮火できない。敵が死ぬまで燃える炎で、この竜の管理妖精で世界は炎に包まれたんだ。でも、効果紋のシステム的にあいつを倒せばともに消える……とは思うんだよ。いかんせん倒したことはないから分かんないや》

さきほどの尾の一撃を喰らわないようにしているのか、タシユケントは大きく距離を取っている。デバフのエフェクトがかかかった頭部を砲で狙撃しているものの、与えている損傷は一桁台で、どう考えてもタシユケントの耐久のほうが早く底をつく。

タシユケント《デバフかけてこの手応え、やっぱり砲撃耐性があるのかな》

画面の低下している数値が示す通り、相手の攻撃性能も衰えている。明らかに迫力の賭けた火炎弾の様が画面越しからも伝わる。それでもタシユケントに直撃すると、致命傷になる一撃ではある。

タシユケントは円を描いて竜の正面から逸れようとしているが、あの竜は首が180度以上、曲がっており、攻撃範囲から逃れ切れない。竜がその翼を大きく広げ、羽ばたく素振りを見せる。

まさか、飛ぶのか。

あの巨体があの翼で飛ぶのなら物理法則無視もいいところだ。

羽ばたかせたのは別の狙いがあったのか、タシユケントが発生した強烈な大気の乱れにより、体勢を崩した。

竜はその生まれた隙を狙う。

知能で考えたのか獣の狩りの本能なのか分からないが、死ぬ、とタシユケントの死亡を強く意識した。

その時、今まで以上に左手の効果紋が桜色の光を帯びた。竜により黒いエフエクトがかかる。

鎌首をもたげ、海面が爆発したかのように水没木が爆ぜる。その薙ぎ払いの一撃は不発に終わる。《ハラショー、君の効果紋の性能がここまで戦えるとは》目の前にはもたげた竜の首だ。切り落とすのには絶好の好機だった。《深海に沈んだ同志の命が可哀想だ》

空色のケープ、白シャツを脱ぎ捨てると、身体のラインが浮き出る黒いインナーが見える。ドラゴンの巨軀に合わせたサイズの刃物が空高く伸びる。もう処刑人が罪人の首を刎ねるに等しいシチュエーションだ。

彼女は巻き舌で空を墮とすがごとく、無骨な咆哮をあげる。

タシユケント「ツラアアアアア！」

狩りの一瞬に全てを賭けるような野生動物の全力の出し方だ。

竜の首が根元から分断され、海へと沈む。

画面に表示されている竜のステータスが全て0になった。その後、リザルト画面が表示された。勝利Sだ。相手を完全に倒してS評価、中々の戦果なのではないだろうか。とりあえず——安堵の息をついて背もたれに背中を深く預けた時だ。

0になったはずの数値が上昇を始める。

次の瞬間、右目の視界は再度、海を映した。

タシユケント《『壊』……？》

そこには【ENCANT・Dragon—壊】と表示されたエネミーが健在している。ただ先程よりもかなり小柄になっており、タシユケントと身体のサイズは変わらない。なのに、先程よりも明確な敵意と威圧感を放っており、神聖を感じさせる光を放っていた。

戦闘ステイタスは火力、耐久、装甲が1万5千まで跳ね上がっている。

ジェノ「……こんなの勝てるか！」

対するタシケントは既に全力を出し尽くし、残機もないという。まだ戦えはするが、だからといって彼女の何百倍も能力値のある敵相手に突っ込ませてもどうにかなるとはジェノには思えない。

竜が翼を広げた直後、光の閃光が円を描くように海面を走る。海が弾けるように燃えた。開幕不意打ちスリップダメージ。

ジェノ「逃げなよ、タシケント！」

本能的直感だった。殺される、ではなく、死ぬ、とそう思った。

勝てる道理がないのに、満身創痍のタシケントは敵に背中を向けない。

タシケント《嫌だね。こいつらに背は向けたくない》

彼女は死んだほうがマシだという。

?-15話

タシケント《蛇に睨まれた蛙ってこんな風なのかな》

タシケント《ちつとも怖くはないけれど》

乾いた笑いを漏らしながら、敵に背中は向けないのはもはや美德ではなく、ただの愚かな自殺行為だ。この戦いのシステムを理解した今だからこそいえることがある。この戦闘はもつと仲間がいないとダメだ。

圧倒的な戦力差だが、一度は確かに倒したのだ。

他のプレイヤーと協力することで勝利に近づく仕様ではないのか、とジェノは考え始めていた。例えばデバフの他にバフやヒールがあつたのなら。その程度の考え、この戦いに生きている彼女が分からないはずもない。

タシケントはその不死に近い再生能力と強力な戦闘力、過去一度たりとも撤退を許可されたことがなかったのかも、だなんて、彼女達の昔話を思い返すと、あながち嘘だと切り捨てられない。ただ意味もあるかないかの時間稼ぎをする為の使い捨ての肉の壁。

タシケント《どうせ死んでも資材化して、それを素材にすれば復活する》

ジェノ「殺されると資材になつてまたその資材を軸に建造すれば君は復活するのかもしれない。だけど、死ぬと分かつて戦うなんて馬鹿げてる。君と僕の間をややこしい政治的問題はないだろ。撤退はすんなりできるはずだ。ただの意地だろう」

タシケント《政治的な問題じゃないならなおさら、逃げないよ》

ジェノ「勝つことを諦めなよ。どうしてそこまでがんばる必要があるんだ」

タシケント《仇だから》

そうですね、大変でしたね。もう認知相手の対応をしまいそう。こんな介護レベル限界突破したババアの世話なんかやってられるか。投げ出しそうになる。ダメだ、そもそも協力して戦える関係じゃなかったんだ、とジェノは敗因に気付く。

タシユケント《今、逃げたら後ろにいる君が死んじゃうけど?》
確かに今タシユケントを失えば、標的にされてお陀仏になるかもしれない。

だから、逃げるべきだといっているんだ。勝てる可能性が見当たらないのに、命を賭けるなんて馬鹿げてる。どれだけその命を安く扱われてきたんだろうか。

タシユケント《って昔は思ってた人間を守って戦ってたよ》

タシユケント《もう一度聞くよ。あたし、逃げていいのかい。あたしは殺されたくらいじゃ死なないんだ。殺されて死ぬのは君のほうだよ。この場で必死になるのはむしろ君のほうじゃないか。別にあたしは君が死んでも、次があるから》

ジェノ「あのね、タシユケント」

タシユケント《怒った?》

ジェノ「その根拠は君が傷ついて良い理由にはならないと思う」
そういうと、タシユケントは笑った。

タシユケント《的外れだ》

タシユケント《死んでもいいからこいつに背を向けたくないんだよ》

あの竜を一度沈めただけでも、歴史で誰もできなかった偉業のほずだ。強く歯噛みする。これをまだ人が全滅していない時に達成していれば、彼女は使命を少しは果たし、希望の星にもなれたのかもしれない。

彼女の体には震えは微塵も見受けられなかった。戦う気力もある。勇敢で立派な兵士なのだろう。彼女の胸についてもいけない勲章が浮かんで見えるほどだ。

でも、勝てない。

その現実が、彼女の命を賭けて戦うその強さこそが、弱点なのだ、と確信させた。

怖いから怖がる。痛いから痛がる。死ぬのは怖い。

そんな当たり前の感覚での逃走を彼女は実行できない。

彼女の舵をぶっ壊した連中のツケを今ここで払うことになってい

る。

空から降る幾つもの炎の砲弾は、海を水柱の樹立地帯に変えている。空で翼を動かし飛び回りながら狙いを定めるのが難しいのか、命中精度がかなりおぎなりなのが逆に弄ばれているようでみじめさをかき立てている。

思えば、殺し合いの日々とは無縁の人生の周りには、大戦時を生き抜いた人達がたくさんいたっけか。介護の仕事を始め、初めて人が死んだとき、思った。

あ、これ死んでるのか。マジかよ。

初めて利用者の死に立ち会った時の感想だった。一か月が過ぎて一人でフロアを回し始めた時、オムツ交換した後、衣服を畳み忘れたことに気づき、引き返した。息をしていない。呼吸停止だ。心臓も動いていなかった。事務所に主任がいたので助けを求めた。

ぼうっと突っ立っていただけで終わった。

さつきまで生きていた人が同じ空間で突如、死亡する。衝撃的な体験だった。

時間が経過して冷静になった時、「あ、最後、適当にやっちゃったな」時間に追われ、しっかりと当てなかつたオムツのことを考える。あの利用者が最後に会ったのが、赤の他人、それも適当な仕事をされていった。そう思うと、後悔の念しか湧いてこなかつた。肩を落として帰る前、先輩がこんなことをいった。

「俺が新人の時は、俺が近くにいて、体動の激しいジイさんだと知ってもいたのに、車椅子から転落させちまつて病院に行かせる羽目になった。そこから三日後に死亡したことがある。先輩からはなぜか慰められた。そんな顔しているあなたを責められないよってな。でもさ、俺はボロクソに責められて、刑事事件にでもなつて裁かれたほうがマシだと今も思ってる」先輩が苦虫を噛み潰したかのようにいった。「寒河江、ここはいつ死んでもおかしくない年寄りばかりだ。いつ死んでも最高のケアが出来ましたっていえるくらいには気を配るんだ。季節が巡るごとに利用者は誰か三凶の川を渡る勢いだぞ」

しつかりやれ。あの春川のジイさんの言葉もよぎった。魂に刷り

込まれた軍人としての生活が手が出る原因で、悪意はなく、あくまで善意だったのかもしれない。

タシユケントに対して持っている有効なケアスキルは、この『DEBBUF』のみ。

魂を燃やせ。後悔しないように。

瞳を見開いた。今の海が介護現場だとは思えないが、魂にまで刷り込まれた教えが土壇場で掘り起こされた。一介の介護士が海軍人と同じレベルの仕事をごなせるとは到底、思えない。ただもうすぐ人が死ぬ、と思つた瞬間、脳がフルスロットルで回転した。

デバフをかける。強く桜の花弁が舞うように光りを放つ。

ジェノ「謝るよ」

瞬間、タシユケントの足が確かに振動した。恐怖に震えたのだ。ジェノは確信した。絶対に逃げまいとしているタシユケントの身体が、強風に煽られた旗のように翻る。

その見開かれた琥珀の瞳から大粒の涙を途切れ途切れに零し、脱兎のごとく逃げ始める。

タシユケント《これ——》

彼女のいつもの笑みは消え失せ、まるで見た目相応の子が泣き喚いているような顔だ。恐らく、彼女を唯一、支えていたナニカをこのデバフの力で木っ端微塵に破壊した。地球から守るべき命を何十億と失つた彼女の気持ちなど、到底、理解できやしないが、タシユケントの激情が恨みの声と化して飛んでくる。幼稚な言葉の絶叫だ。

タシユケント《デバフをかけたな……！》

タシユケント《あたしに！》

膝が震え、すぐに旋回をした。

タシユケント《こいつに背を向けるということが、あたしにとってどれほどのことか》

タシユケント《知らないくせに！》

その正直な心の吐露と全ての感情が流れるかのような涙の表現力が、棘となつてジェノの心を貫いた。逃走の判断は正解かどうかの判断はできない。勝つ手段ではない。ただあそこで彼女は死ぬだけ、と

思ったゆえの行動だ。

ジエノ「デバフ……」

「あつたのは、絶望だ。」

陸に向かうタシケントは炎上しており、爆ぜる海水を浴びても、その炎は一向に鎮火しない。海をも燃やし、絶命するまで消えないスリップダメージを消す方法として思い浮かんだのは唯一つだ。

根源の「ENCANT・Dragon」を消滅させることだ。

あのエンチャント効果にデバフはかけられないだろうか。

いや、あの炎にデバフをかけても、苦しみが長引くだけかもしれない。

炎に包まれた身体から油の乗った肉が焼ける音がなぜか聞こえる。炎上し、焼け爛れ、時折、惨めなうめき声を漏らしていた。目前で焼死する人間、その炎を鎮火することは不可能、そして燃え移ることを恐れ、触れることすらもできない。

死を眺めるだけの無力な時間に変化の兆しはない。

ジエノ「もういいだろ……」

命中率の粗悪な攻撃に痺れを切らしたのか、竜が高度を下げる。台風のような強烈に乱れた風圧が、海を揺らした。こうやってこの世界の人間は敗けたんだな、とジエノは思う。恐怖は不思議となかった。あるのは全てに対する投げやりな諦念のみだ。

竜が大口を開き、炎弾を発射した。

逃がしてくれる気はない。

絶体絶命だ。ああ、とジエノは頭を抱える。

今度は戦え、だなんていふべきなのか。思考や意地が混ざり、結論が出ない。効果紋を使用してなお、圧倒的かつ絶望的な戦力差にもはや手の施しようがない現実があるのみだった。炎上しながら航行する船を、焼かれながら死にゆく彼女を見つめる。

ジエノ「やっぱり」

逃げる。あのまま彼女達を置き去りにして逃げたら、何事もなかったかのように、今までの生活に戻ることができだろうか。

対面のガラスにうつすらと映る一人の男の弱さにデバフをかける。

鉛のように重かった足が、動く。

2

世界の終わりでも見ているかのような光景だった。

消えない炎が延焼し、海を燃やしている。かつてこの世界の歴史ではこの炎は消えることなく、延々と気体、液体、固形物を問わず、炎の法則まで無視して万物を焼いたのだろう。一度、延焼したら世界を焼き尽くすまで鎮火することのない終焉の業火だ。

浅瀬まで彼女がやってくる。炎上したままだ。

タシユケント「戦略なき敵前逃亡をさせたね！」

元氣そうではあった。

タシユケント「あたしを泣かせる為にデバフを使うやつは初めてお目にかかった。開いた口が塞がらないとは正にこのことだよ」

感謝はされなれないと思ったが、予想以上の怒りだ。

タシユケント「あたしは殺された程度では死なないのになぜ強制撤退させたのか。敗けても死ぬのは君だけだったから、あたしには何の不都合もないのに！」

タシユケント「何様のつもりなのか！」

神様、とでも返したくなるな。本当、こいつこそ何様のつもりなんだ。

タシユケント「この屈辱は」

恨みを漏らす構わず彼女を抱えた。同時に、エンチャントの炎がジェノに燃え移る。さすがのタシユケントもその行動には驚いたのか、「本当に心中なの！」と素っ頓狂な声を出した。まだ元氣そうでなによりだ。燃える炎にもデバフをかけて、そのまま走る。

ジェノ「撤退すれば僕が死ぬと体を張ってくれたそのせめてものお礼」

タシユケント「君に燃え移ったこの炎は」

ジェノ「知ってる」

タシユケント「無理だよ。絶対に」断定の口調だ。「逃げきれた試し

がない」

ジエノ「逃げるってどこに」

タシユケント「ウインオアデッド。勝つか死ぬかだ」

ジエノ「無理だ」

人間の耐久値がどの程度かは知らないが、そうは持つまい。エンチャントの炎はデバフをかけても、じわじわと肌をちりちりと焼いているのが分かる。それでもサウナ程度の熱しか感じないが、彼女を抱えてどこまで持つか。炎弾の一つがかすれば恐らく終わり。

空を見上げれば、竜の姿が見える。

ジエノ「これ、デバフのイメージとはちよつと違う。敵のステイタスをダウンさせるだけじゃなくて、数値を低下させるんだろ。精神にも効いてるし、用途は幅広いよ」

物理的にも精神的にもデバフの力は効いた。なら、ほかにもいろいろと試してみる価値はある。試してみないと、どうしようもない。既に息はあがりかけている。竜の周囲に黒いエフェクトがかかる。竜が空で滑ってこけるように、反転した。

重力にも、デバフがかかる。

ここまで効果が及ぶのならもう全ての事象にかかるんじゃないか。すぐにタシユケントにも重ね掛けをすると、抱えている彼女が明らかに軽くなる。速度があがった。それでもドラゴンは獲物をしとめようと、炎弾を吐き出すが、それすら勢いをなくし、見当違いの方向に飛んでゆく。

もう、少し。

街中に入った。

竜の咆哮が届く。なんとなく苛立っているような気がした。地面が揺れた。なにが起きたのかはすぐに察した。視認できないゆえにデバフをかけられなかった炎弾が建造物に命中した。砕け散った瓦礫の破片が空から降ってくる。避けられない。

後頭部に当たった。目の前が一瞬、ブラックアウトする。デバフの効果が及ぶ前、殺し切れなかった物理法則だが、活動に支障が出る程の傷ではない。まだ体は動く。

タシユケント「やっぱり弱いな、あたしって……」

精神的デバフのせいかな戦意がもうないな。生意気で容赦なく強気で明るい今までの彼女が跡形もない。そろそろ限界か。延焼の継続損傷で彼女の耐久値はもう5を切っている。体も心も大破してしまっている上、ケンカ中と来た。

周りは瓦礫の山、上空にはデバフの反動に耐えきれなくなったのか、近くのビルの屋上に降り立ち、翼を畳んだ。眼下をじいっと見下ろしている。こちらを見失っているのか、行動はなかった。ここは右目の視界を信じることにして、竜の視界の動きと合わせて、隣のビルに移動する。

タシユケント「管理妖精が攻撃してこない」

タシユケント「その左目の仕様は便利だけどさ、位置はバレていると思うよ」

足に力が入らなくなった。そのまま尻もちをつく。延焼は下半身を中心に燃え広がっている。熱さは特にないが、痛みはある。焼かれているというより、壊死しているような風だ。お互いに機動力を潰されてはただの的となった。タシユケントの兵装の損傷具合で攻撃手段を失い、デバフのみでは勝算がまるでない。

ジェノ「まだ動けそうだけど、もうやめようか」

デバフで性能を下げた分、一撃で死ねない苦しみを味わうだけだ。

タシユケント「君が死ぬだけだから構わないけど」

失望したというよりは、納得しているような顔だ。

タシユケント「根性がないね」

ビルの壁に背中を預けて座っている。今、ドラゴンの攻撃が止んでいる理由を考える。見つかっただけで、あえて死ぬのを待たれている動物の狩猟行動のような待機だった。

ジェノ「僕は、人並みにがんばって生きていたつもりだ」

タシユケント「人並み、ね」自嘲のような笑み。「人間は最後まで身内で争っていた。身を粉にして死んでゆくあたし達に責任を押し付けて。それでもあたし達は戦ったさ。人間に従うしかなかったというより、管理妖精相手には戦うしかなかったからだ」

タシユケント「あたしの仲間、根はいい人、状況が人にこうさせただけっていう」

タシユケント「――馬鹿ばかりだった」

タシユケント「根が良くても葉から毒をまき散らし、人喰らいの花を咲かせているのに、根はいいやつだなんて、正しくお笑い草だ。そもそもあたしがなんで人の為に戦わなきゃならなかったんだ。それでも戦って殺されてを繰り返した。今度は――」

タシユケント「君達があたし達の為に戦ってよ！」

きつとその言葉は本心だ。

可愛い子が本気でキレた時ってギャップが激しく、整った分だけ醜悪に映るよ。

タシユケント「また負けか。分かっているけどさ、絶対的な上下関係のある軍ではいえなかった言葉をいえた分だけすつきりした。人間と対等な関係も悪くないかな」

その言葉を最後に彼女の体は収縮を始め、空色の鉄片へと変わる。ジエノ「春川のじいさんが効果紋を作った理由は、なんなんだ？」鉄片に向かって囁くが、当然、返事はない。

空色の鉄片を握り締め、起き上がる。

ジエノ「多分、逆だったんじゃないかな」

君達に頼るしかなかった人間のほうが負い目を感じるんじゃないかな、と思う。提督とか艦娘とか深海棲艦だなんて今でもよく理解してはいないけども、記憶で視た効果紋を宿した軍人は嬉しそうに笑っていた。顔だけでなく、声も仕草も笑っていた。

根がいいやつが毒花を咲かせるのは悲しいことだ。

天井を見上げる。

妖精だか神だかなんだか知らないが、この天井上にいる力を持った者が突き付ける現実と、向こうの世界の現実がリンクする。

ジエノ「わかったよ」

なにをして欲しいか、彼女は確かにいった。

今度は僕が君達の為に戦うよ。

理不尽には慣れている。社会人だからな。

あの竜を、ただのトカゲにまで引きずり落とす。
このデバフの力で。

?-16話

お前の代わりは他にいる。

中学一年生の頃、歳が一つ上の先輩にいわれた言葉だ。

社会の授業で政治の制度の話聞いた時に考えた。その席は限られている。毎日、がんばって汗水垂らして心で耐えて今している仕事と比較しても、政治家はみんなの生活を良くしたいと思う人が就く職業なんだ、と先輩はいつた。みんなの生活を良くしたいという思想を持った人間はごまんというて、加えて社会的地位や給料も良い。

だから、他に変わりはいるんだろうな、と思い、それを知っているから、潔さをかなぐり捨てて政治家にしがみつくのかな、と考えたことを思い出した。

階段を一步ずつ、のぼる。

頭脳が、容姿が、生まれた家庭が、運が、運動神経、ありとあらゆる性能差が人間には生まれつきある。凡人が努力しても決して届かない領域をジエノは知っていた。しかし、だ。凡人でも幸せに生きていられることをジエノは身を以て知っている。

その幸せを最近、よく見知らぬ人から否定される。

最近、生きていくだけでしゃべったこともない人が上から目線で価値観の鈍器を振り回し、ブン殴ってくる。こういえば傷つく人がいることを考慮しない非調和的な人間が好きになれなかった。

その主張全てが性能差ゆえに出てくる言葉なら、どうあがいても足りない。

世の中には格差があり、平等とは程遠い。例え、文明の進化が止まってもいい。誰かが傷つき、無念の為に死んでいく犠牲を伴うくらいならば、どうにかしなければ。

屋上に佇む竜の瞳と視線が合う。

ドラゴンがなんだよ。

死ぬことより、生きることのほうが怖いんだよ。

すでに恐怖にはデバフをかけている。

タシユケントのような常軌を逸したやつでさえ、デバフをかければただの人に成り下がっていた。

「才人を凡人に落とすデバフは観客の前でやれば苦情の嵐ですよ」

爬虫類が笑うと、気味が悪いな。

ジエノ「しゃべれたんだ」

「意外でしたか」

ジエノ「いいや」

朝霜やタシユケントを造るどころか、朝霜の話だと向こうの世界もこいつらが建造したという話だ。しかし、もう眉唾ではない。人間の言語くらい理解していないとおかしいのだ。ただイメージに囚われているゆえの違和感が強いだけだ。

「少しあなたと、その効果紋に興味が湧きました」

「デバフは竜を蜥蜴に変える魔法ではなく、損傷状態の理屈なんですよ。倍率が高かろうと、損傷状態である大破状態までステイタスを下げると効果紋です」

「初心者の方はよく誤解されます。豆知識なのですが」

「理屈的には損傷状態を戻すヒールこそ、デバフの対なのです。バフは改造や改装のステイタス向上の理屈の延長線上ですからね。あなたの効果紋は重力や精神という現象にまで影響する時点でデバフの皮をかぶったなにか。タシユケントは見抜けていませんね」

「厳密にあなたのソレは、デバフではない」

「私にもわかりません。なので、勝ち目はあるかもしれませんが」

心を読まれたかのような先制の言葉だ。

「我々は勝利や生への執着はありませんが」

「夢を、観る」

「深海棲艦と戦った頃は実際、奴隷のような存在でしたしね」

いかにも無邪気な妖精って感じだが、ここまで行くと可愛くもない。実際、朝霜から聞いていた通りなら奴隷はやっていたんだろう。建造とか開発とか人間の指示に従ってこなしていたという。流れ込

んできた記憶でも、どんな命令に対しても妖精は従順だった。

ジエノ「ごめん、君の願望や存在意義はどうでもいい」

どこか遠い異国の歴史と交わっている。そういう実感が沸かない戦争の話は耳タコだ。施設長からは会議のために「利用者に寄り添う」といつているが、九十超えの人の歴史なんざたかが23年を生きただけが理解できるものではない。ましてやもつと長い時を生きている朝霜やタシケントや管理妖精ならなおさらの話だ。

ジエノ「彼女達は」

「リサイクル用品ですね」

意識を集中させて、デバフをかける。その後、水分で滲み、てらてらと月夜に反射する鼻っ面を思いきり、殴り飛ばした。竜の首が大きくしなり、身体が床を横転する。もしも今、タシケントが健在ならば、恐らく彼女の一発で決着したはずだ。

「よく分からない人だ」

よく分からないのは、お互い様だ。妖精は相手を自分本位でしか見ていない。言葉の通りなら自分が楽しければそれで満足なのだ。ただの主体性に満ちた無邪気の塊である。子供相手に本気で怒るのは馬鹿らしくなる。

不意に膝が折れて、力なく崩れ落ちた。

下半身に力が入らず、女の子座りのまま動けない。

でも、諦めるにはまだ早い。

神だか妖精だかドラゴンとか、どれだけ強くてもこのデバフでただの蜥蜴になるまで性能を引きずり落とせば、非力な人間でも勝てるはずだ。このデバフの効果紋、知識は完璧とはいえないが、目前の妖精に対しての感情が隆起するほど、倍率が跳ね上がる。

朝霜から聞いている。効果紋は色々な種類があって、建造した相棒によつて大まかな四つの種類に分けられ、個々によつて性格や相性のように千差万別だという。この効果紋は文字列が入れ替わったり消えたりと安定しなかったものの、タシケントで烙印したこの烙印の『S』の英文字は見間違いでなかったようだ。

【Debuff&Share】の文字が桜色に輝いているから。

「アンド……？」

竜の管理妖精が口角をつりあげ、獰猛な牙を覗かせる。

「ふふ、桜色つて」

ジエノ「何がおかしいんだ？」

「人間にもいるんですね」

「大和や矢矧のような強く優しい戦場の聖人が」

「もつとも聖人という人種は」

「なぜかサイコパシーの数値が高いもの」

知るかよ。大和や矢矧つて誰だって。

切り替える。

シエアしてどうなる。この場を大逆転に導く力となり得るのか。効果紋を使用する。弱体化のほうだ。デバフの文字が変わる。

デバフの効果自体が変わった訳でもない。身体も傷だらけでダメージそのものにデバフをかけても足に力が入らない。すでに限界を超えて戦闘不能であることを意味している。

しかし、この戦闘の大体の様子は理解した。

春川のじいさんや朝霜、タシユケントの話を思い返して頭を回しながら、目の前の竜の管理妖精のことを考える。丁寧に効果紋を説明し、この戦いを教授した管理妖精。

ジエノ「そっか……」

タシユケントが海で切り落とした首には確かに肉があった。ドラゴンの身体構造など知らずとも、なんとなく亀やアルマジロと同じく、表皮の装甲が砲弾を通さないほど硬いだけで、肉自体は柔いのではないか、という予想が浮かんだのだ。

トドメ、といわんばかりに竜はその大顎を開ける。

あの炎でも建造できるんじゃないか？

だけど、建造時間があつたはずだ。

間に合わなさそうなので却下した。

ならできるのは、デバフとは似て非なる弱体化の力だ。

「あなたのソレはもはやデスの呪文に近いですわ……」

ジェノ「君は忖度することを覚えて欲しい」

ジェノ「痛い、苦しい、死にそうだ」

「デバフ……いや、これは——」

「ちっぽけな命の苦しみ……」

デバフとは少し違う。損傷状態の共有による弱体化。

管理妖精が力なく横たわる。苦痛に歪む顔だ。

伝わる。

痛い。苦しい。管理妖精にもそのような心身の苦痛はあるようだ。

その心情が効果紋を通してダイレクトに伝わってくる。損傷状態を人間と同じにした上、デバフによる損傷緩和は行っていない。ひどく、堪えているようで、のた打ち回っている。

「その共有紋……」声が、震えていた。初めて焦りと受け取れる。

ただ竜の管理妖精は痛みに喘いでいる訳ではない。

「私達の価値観を塗り替えられそうだ」

脅威と認識されただけだ。

今、ジェノが効果紋で行っているのはこの管理妖精を打倒することではなかった。その頭の中の情報を共有の力で引き抜いている。敵を倒す力よりも、彼女達を救う知識を欲した。

「止めろ。もとよりあなたをここで殺す気はなく」

ジェノ「君に恨みはない。敵とも思わない。でも今は、試させてくれ」

「それ以上、私から知識を抜くのなら殺す必要が出てくる」

寝返りを打つように体勢を戻し、野太い四肢で力強く地面を踏んだ。

殺す気で結構だ。別に長生きしたい訳じゃない。今の仕事は好きで暮らしても行けるけど、未来である施設にいる老人達のような暮らしをしていけるかは分からない。

とりあえず今を生きなければ。

ジェノ「理解した。人間改装設計図は、タシケントがいれば、そういう使い道もあるのか。その設計図を創る為に、星の命、動物の命

を奪ったんだね」

ジエノ「なら、君達が生贄として捧げた生命は復活するはずだ」

ジエノ「資材が艦娘に化けるように君達が殺した命は輪廻するんだ」

その管理妖精の表情からして、それが『可』だと告げている。

ジエノ「それができる唯一無二の彼女は正しく星の船だ」

これ以上、語る気力も惜しい。この屋上に来た時から腹はくくつて
いる。

神だか妖精だかドラゴンとか、どれだけ強くてもデバフでただの蜥蜴になるまで性能を引きずり落とせば人間が勝てない道理は消え失せるはずだ。「恨みはない」そう呪文のようにつぶやく。報いの不幸を求める存在はいても、単純に不幸になる為に生きている命はいないはずだ。少なくとも、見たことはない。

だから、原因を憎み、臆病を殺せ。

竜が炎弾を射出する。

デバフにも速度があるんだな。その威力は殺し切れない。

まだ試す。石つぶてが当たった程度には痛い。

被弾した右腕が弾かれ、拳大の青痣ができる。体力的にはまだ持つが、エンチャントのスリッパダメのせいで足がぬかるみに浸かっているかのように重い。意外と人間、本気になれば耐えられるもんだな、とも思う。

弱体化、物理や精神にもかかる。

このデバフは数値を下げるだけじゃない。

タシケントが海で切り落とした竜首には確かに肉があった。ドラゴンの身体構造なぞ知らずとも、なんとなく亀やアルマジロと同じく、表皮の装甲が砲弾を通さないほど硬いだけで、肉自体は柔いのではないか、という予想が浮かんだのだ。

再度、発射された炎弾のタイミングを見計らって、物理にデバフをかけた。

同時にその反動を支える為の竜の四足の踏ん張りを弱めた。

砲塔が支えを失くしたに等しい。

発射された炎弾は空へと吸い込まれるように飛んでゆく。

まだだった。このデバフは常軌を逸している。物理法則にまで干渉する。それは性能を下げる、ではなく、数値を下げる力なのではないだろうか。

すぐに、次の予想を見つけろ。

物理法則を殺し切れていない。空を飛んだ炎の砲撃は勢いこそ殺してはいるものの、物理に反してはいないことからマイナスの境地まで性能を下げることはできないようだ。空中で炎砲弾ふわつと停止した。重力に従い、大地に落ちる。

このデバフは数値を下げるのだが、もっと具体的にいえば、数値を0に近づけるデバフだ。

どこまで数値を落とせるのか。

それを試そうと思った直後、力が抜けた。左手の効果紋の輝きが弱まった。

資材の力を源にした建造体から炉を通して流入する効果紋の力。バフは強化、デバフは損傷、エンチャントは付与、ヒールは入渠、効果紋のそれぞれはこの海のシステムを応用した力だ。そのシステムがこの身体が適応しているのなら、身体の傷は入渠で治る。

だから、怖がるな。

竜がこれみよがしに大翼を広げ、空を飛ぶ。

ここまでやって今更、空からビルを破壊されたら詰みか。

飛翔した竜を追いかける術はない。十分よくやった、という自分を殴り殺し、更に頭をひねる。

懐とポケットからタシケントの鉄片と火種のライターを取り出した。鉄片を火であぶる。彼女の全てが凝縮された鉄片が艦娘の形にする建造は時間がかかる。

高速建造材。

建造時間を短縮する力なら、この数値を0に近づけるデバフで代替できないか。「今度は君達があたし達の為に戦ってよ」という言葉に迷ったが、もう十分だろう。本来の目的を考えれば些細な問題だ。あいつに勝つ理由があるのは、彼女なのだから。

建造された空色の彼女は、帽子の唾を深く下げ、
タシユケント「多分、現状は把握してる」

左腕にまとう空色の液体がうねり、形成されたのはプールだ。右腕でつかまれ、その水葬のなかにドボン、と投げ捨てられた。さすが本職なだけあって効果紋持ちに入渠が有効だと知っている風だ。湯舟に浸かって再生の極楽を味わいながら、空を見上げる。

ジェノ「今なら勝てるけど、君の艦装に装備されている砲では貫けないよ」

タシユケント「全身全霊の一撃、ね」

外せば、終わりだ。それを悟ったのか。どうせ建造したての彼女の内臓資材などたかが知れている。向こうで建造された時に吸収した資材の残りはなかったから、一度、彼女は鉄片化した。正しく血潮を絞るような武装開発を彼女は始める。

竜は空を蛇行し、旋回を始めている。あの空から炎弾を発射しようと狙いを定めようとしている。自身の損壊度を把握しているのか、見た目相応の形相を表情に貼り付けている。血潮や体液を空から零しながら、トドメを刺そうと巨大なアギトを広げる。

タシユケント「41センチだ。実物サイズの」

地面に設置された長い筒が空を向く。

タシユケントのほうが早かった。あのドラゴンの厄介なところは知能が高いということだ。恐らくこちらがこの一撃に賭けていることを察している。だから、攻撃を中止し、回避の行動を取ろうと大きく翼を舞わせたのだろう。

タシユケント「空から、墜ちろお！」

耳を貫く砲撃音が鳴る。

瞬間、静寂に包まれる。鼓膜がイカれた。その轟音が脳にまで響いたのか、意識までも途切れかける。その砲撃は空に吸い込まれるように飛んでいったのだろうか、竜の様子に変わりはなかった。

タシユケントが尻もちをつく。

タシユケント「ご……めん」

彼女は乾いた笑いを浮かべた。

タシユケント「外し、ちやった」

白んだ空に変わらぬ敵が舞う姿、そしてその情報には確かに見える黒のエフェクトだ。当たるか当たらないかでいえば、当たらないだろうな、とは予想していた。空を飛ぶ生き物に一発の砲撃を命中させるのは難しい。ましてや知能があり、認識されているのだ。

ジェノ「どうせ外すと思っていた。だから『当たるようにした』よ」星にならんがごとく、飛んでゆく先に放った必殺の一撃が、すでに身を翻して空から降ってきている。デバフで砲撃の勢いを殺した。やがて頂点に達した砲弾は重力によつて空から降り注ぐ。

大空の大気の圧を、空気の流れを、今まで学んだデバフの使い方です補助する。あの竜は気づいていないのか、大口を開けてトドメの一撃を刺そうとしている。

こちらのほうが早い。

砲弾は吸い込まれるように、着弾地点となったエンチャント・ドラゴンに突き刺さる。その虫の息の耐久でクリティカルに当たれば、息の根を止めるファイナーレの一撃には十分に成り得る。

ほくそ笑んだ大蜥蜴の顔に直撃した。艦載機のように墜ちてゆく。虫の息の耐久値が低下し、0になった途端、竜は光となって弾けて消えた。

3

彼女達の星を焼いた存在は死した。

彼女が何度挑んでも勝てなかった敵は意外にもあっけなく。

この身を焦がす延焼の力も綺麗さっぱり消失している。

綺麗な星空と、墓標のように並ぶ静寂なビル群に包まれ、虚しさを風が撫でてゆく。深呼吸をして、生き延びたことを実感する。今年の新年はとんでもなく過激だったな。

タシユケントは「ハ、ハハハ……」

またもや乾いた笑いを漏らして、

——501戦、1勝。

そう蚊の泣くような声でつぶやいた。
見た目相応の少女の顔でわんわんと泣いた。

ジエノ「僕と君しかいない世界でも普通に太陽は昇るんだねって」
そう彼はいう。まだ現実の理解が追いついていない。

夢か現か、感覚が活性化した時には信じられない光景があった。

あの竜の管理妖精の装甲が砕け、おびただしい血を流し、外見相応の強面の形相で戦っていた。予想外が過ぎて、戸惑いを処理できずにいる。艦装探知でも竜の管理妖精の反応は確認できず、ようやくあの管理妖精を倒した事実を受け入れられた。

ジエノ「君も疲れたのなら、入渠したらどう」

タシケント「なんで君は怒らないの？」

違和感はそのこだ。

好き勝手やったうえにそう罵詈雑言を飛ばして彼を残して一人、戦いを諦めた。最後の一撃までフォローされた始末だ。彼にかける言葉はもちろん、合わせる面も、ないのは承知の上だ。今も顔から火が出そうになっている。

ジエノ「怒ってるよ。でも、昔からそういうのが表面に出ないんだ」

タシケント「それはどうして。君の、考え方、かな」

ジエノ「こういうの語る場面ってなかなかないよね。でも、みんな一つは胸に秘めてる」

ジエノ「報いとしての不幸を求める命はある。死に救いを見出す人だっている。でも単純に不幸になりたくて生きている人はいないと思うんだ。そういう世界で生きているって僕は思うから、どんな悲惨な物語でも、もともとは対立しているだけだ」

ジエノ「敵対はしていない。誰ともね」

そのなかばお花畑の思想がこの違和感の正体か。

全ては対立しているだけで敵対じゃない。

ならば、敵はいない。

つまり、彼は無敵だ。

彼はただの人間だった頃から、無敵の境地にいる。

薄気味悪さの正体はこれだろうか。「今の一度も敵のいなかった人

生なんてなかったから、気味悪く感じずには」といったところで、顔面に衝撃を感じた。「へ」と鼻から赤い鮮血が噴出したのが見える。殴られた。そう認識すると身体は自然に受け身を取った。

タシユケント「突然なにさ……女の子に暴力振るうのは最低だ」

ジエノ「暴力振るうのが最低だし、そもそも君は自分をそういう風に認識していないくせによくいうよ。でも君は赦しが欲しそうな気がしたから、これが罰ってことで今までのお互いの無礼に関してはリセットってことで」

ジエノ「大事な話だ。聞きなよ。あの竜からドロップしたものを拾ってみて」

彼は笑って、左手を空に翳した。

ジエノ「君が選ぶべきこと」

2

竜の管理妖精が消えた辺りに一枚の改装図が、ある。

その設計図を拾い上げる、選べ、といった彼の言葉の真意を現実として認識する。

廃墟の町を歩きながら、ぼうつと空を見上げる。意思なく歩いた先にあるのは、廃墟の鎮守府だった。

過去が色づき、蘇る。

戦いの毎日に明け暮れながらも、鎮守府でバカやってはしゃいでいた時間だ。笠ね、繰り返す、青春染みた過去の群像と、戦い敗けて奪われた行き場のなくなった悔しさと、後悔が輪廻するだけの孤独の日々を終える。歩を進めるたびに褪せてゆく。

出入り口の地点に立っていた彼が、思考を共有したかのように、いう。

ジエノ「なにかいうことあるよね」

帽子を強くつかみ、目元を覆い隠す。

タシユケント「ふざけないでくれ。なんでいまさら……」

タシユケント「こんな空しい勝利があつてたまるかって」

タシユケント「遅いんだつてば。誰もいなくなった世界なんか救つてどうするんだ。名誉どころか大切な人達も、ありがとうの言葉一つももらえない戦いなんか」

タシユケント「そんな戦いに命を賭けられる君のような強い人がなんで——」

タシユケント「どうして君はあの頃、現れなかったんだよ……」
胸倉をつかみ、むちやくちやな罵声を飛ばす。

タシユケント「見てよこの世界」

タシユケント「緑が枯れ、人工物が瓦礫と化して、あたしの鼓動だけが脈を打つ」

そういうと、彼は空を見上げた。

「ジエノ」でも、空だけは綺麗だね」

そんな気の抜けることをいう。

踵を返すと、「じゃあね」と軽く手を振った。

タシユケント「ちよつと待って。ここまで希望を見せといて」

タシユケント「残りをぶつ殺すことを手伝わないの」

タシユケント「あたしの過去を見て、同情して命を賭けた訳では、ないの？」

彼は足を止めて、振り返る。笑っている。

ジエノ「同情はしたけど、あくまで君が困っているから助けただけ。困っている人を無視して罪悪感に苛まれるのが嫌なだけだよ。君がいうように僕は命を賭けて君のために戦った。勝てる。勝てた。なからは君が万策を用いばいいだけじゃないか」

ジエノ「がんばれ。君の命をどう使おうが、君の自由だ」

タシユケント「そんなの……」

ジエノ「ああ、もう。捨てられた子犬のような顔をしないでくれ」
そういわれて少し羞恥を感じた。

頬を軽く叩いて気合を入れ直す。

ジエノ「あのさ、管理妖精は別に悪いやつじゃない。ただたくさん殺しただけだ。人間は人間以外にぶつ殺されても文句いえないようなことしてるよ。各々の幸せの価値観があるんだろうけども、関係を

敵対だと吹聴するのは悪魔の所業だと思っただ」

タシユケント「いい加減、反吐が出る無敵の哲学だよ」

タシユケント「万策を用いるのなら君をくだすのみだ」

力を行使するのみ。残りの内臓資材はもう今の肉体を形成している分で終わりだけれども、あの強力無比な効果紋は例え殺すことになっても、諦める訳には行かない。あの桜色をした出会いの光を宿したからには、絶対につかんで離さない。

ジェノ「この力の良いところは相対的に僕が強くなるってところだよね」

ジェノ「限られた椅子がある。努力では届かない夢がある。格差がある」

ジェノ「平等は絶対に上のやつらを引きずり落としたほうが手取り早いよ」

デバフの効力で戦闘力は大幅に削られていく。破損状態による身体能力の低下ならば、炉の力を駆使すれば入渠システムに沿ってなんとかなる。

上限値の天井を引きずり下げられている。

海防艦辺りまで行ったか？

デバフの効果紋は四種の中で最も対人間に特化している。その根拠は人間は性能を10%を下げられた時点で無力化される様は傍から見ていけば、呪いの現象だった。

公平とか平等とか共有とか、とうの昔に捨てた思想を彼は本気で持っている。

道理で優しく見える訳だ、と納得する。資本主義の中で生きる個人規模の共産主義者は優しい人に見えるものだ。かつてのあたしが良い子だと思われていたように。

ジェノ「大丈夫かい？」

優しい声音と顔で手を差し伸べてくる。タシユケント「君のデバフのせいで、起き上がれないんだよ」

デバフの効力で戦闘力は大幅に削られている。破損状態による身体能力の低下ならば、炉のの力を駆使すればなんとかなる。この力の

抜けようは単純に天井を下げられている、このただの脆弱なはずの人間は、今は神ですらも同格の存在にまで叩き落とすだろう。

彼は共産主義者の才能が一級品だな。相性が良いわけだよ。

ジエノ「なんか今になってどつと疲れが襲ってきた……」

彼はその場に座り込む。

上手くやれそうだと彼に好感を抱きつつ、頭で未来図を描く。

タシユケント「人間改装設計図……」

不意に疑問が湧いた。管理妖精はこれを一体、どうやって作ったのだろう。

炉の力を宿した前期型後期型は人間としての退路を断つ代わりに艦装を肉に収納し、生成できる形態だ。もともと解体など管理妖精が現れた時から、効果紋が開発された後か。勝利の為に捧げた。それを解体可能にするだけでなく、己の過去すら書き換え、違和感なく人の輪に混ざるためのアイテムだった。

春川泰造はあの戦いの溶鉱炉を星の命を抽出するものだといった。そもそも溶鉱炉前期型、そして後期型が解体が難しくなったのはその溶鉱炉の力の塊である艦装を肉体にセットで宿したからだという。だから、妖精は艦装と艦娘の体を別々で造ったんだ、と。

タシユケント「そうだよ。妖精は従順だった」

いきなり開始された虐殺の動機は暇な八十年の間に何度も考えた。タイミング的には溶鉱炉内臓型と効果紋が開発されてからだ。

この星で葬られた何百億の命を贄として、用意された解体の枠はたったの六つ。これは、その椅子を奪い合う物語として開戦の火蓋が切られたのだと思っていた。初建造時にこの頭に持たされた情報は、そういう趣旨だったはずだ。

——これはこの星で失った命の資材の塊が鉄片化したようなものなんじゃ？

あたし達はどうかやって建造される。炉からだ。

資材を使って、生まれて、そして死ねば生体情報の塊である鉄片となる。

タシユケント「なら、元の形に戻すこともできる、の……かな」

彼がげんなりした顔になる。こいつ、知ってるな。

これはその命が詰まったアイテムなのだ。

いい変えるのならば、艦娘や深海棲艦の生体情報が詰まった鉄片と同じだ。その鉄片は艦娘になる。つまり、管理妖精達が所持するこのアイテムを集めれば、

ジエノ「歴史的な大敗の前の状況に戻すことが、できるのかもね」

彼がまたもや思考を共有したかのように、いう。

再び過去が色づき、蘇る。戦いの毎日に明け暮れながらも、鎮守府でバカやつてはしゃげていた時間だ。

繰り返す青春染みた過去の群像と、戦い敗けて奪われた行き場のなくなつた悔しさと、後悔が輪廻するだけの孤独の日々を終え、今、新たな選択肢が提示された。

タシユケント「その使い方は、止めよう」

ジエノ「その答えは意外」

前の状態に再構築しても、その先にあつたのはあの孤独だった。深海棲艦と戦つていた二回目の歴史に戻れば、春川泰造のように誰かが炉の真理を究明するだろう。効果紋が創造されるだろう。海軍人達は最前線で戦う力を入れ、喜ぶだろう。そして、繰り返されるだろう。争いの連鎖にしなければならない。

みんなとのあの日々を諦めちやえば、終わる。

一度目も二度目も、この三度目だって、きっとそうだ。

再構築だなんて愚の骨頂だ。一度、手にした終わりをひっくり返して理想の未来を追うそのバイタリティは悪なのだ。「再構築の改装図ではなく、人間改装図として使用することこそ、この道化のような運命から解放されるはずなのだから。」

ジエノ「明るいだけの未来なんてありえないけどね」

彼は苦笑いだ。いじけた子供をあやすような、そんな慈愛を含んでいる。

タシユケント「二十年生きてただけの若造が知った風な口を聞く……な？」

そういつた途端、頭の中に記憶が弾けた。老人に囲まれた彼の記憶

だ、と察するのに時間はかからない。施設の中を「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と徘徊するおばあちゃん、「みんななにしとんやろ」と遠くを見るような眼で窓外を眺めているおじいちゃんの姿だ。

そして、いくつもの死別だ。彼はその度に、本当に彼等は良い死に方ができたのだろうか、と苦悩する。実際、そうでもないのだろう。転んで呆気なく逝った年寄りも、最後の瞬間に家族と出会うことのできなかつた老人、様々な悲しい現実があったからだ。

ジェノ「ああしておけば挽回できた後悔も」

ジェノ「謝る相手のいない懺悔を抱えた時も」

ジェノ「君は、明るい未来でも思い描いて耐えるの?」

ジェノ「差すかどうか分からない未来の光を思い描くことなんかより」

ジェノ「僕はそばにいてくれる人が励ましてくれるほうがよほど、救いだつたよ」

その彼の言葉に、齒を食い縛る。

その通りだ、と受け止めたからだ。辛い毎日を耐え忍べていたのは、手が届くか分からない明るい未来というよりもそばにいた皆とのやり取りだ。戦って海に沈んだ記憶も、教えてくれる。深い海の中へ沈んでゆく。反射した光もやがて届かなくなる。救出された時、誰かの希望の声だけが、聴こえたのを覚えている。

光に見放された暗い海の底に救いを差し伸べるのは、音と声だつた。

タシケント「失って傷つくのはたくさんだけど」

飽きるほど眺めた澄んだ星空を見上げる。みんなは星になった。あたしは性能が崇つて、ともに朽ち果てることができず、みんなをこの世界から置いていってしまった。

やっと星になれたと思つたら、また誰かの掌の上で踊る舞台装置の上で意識を取り戻した。

タシケント「それでも思い出とは成り切れなかった過去がある時点で」

進路はもやがかりながらも確定したようなものだ。先に逝つた

仲間達、あの空の輝きに手が届くのならば、みんなを置き去りにしたのはあたしじゃない。

置き去りにされたのはあたしのほう？

みんな、この戦いの先にある未来で待ってるの？

ジエノ「その未来は大変だよ」

ジエノ「君は一体どれだけ自分を犠牲にすれば気が済むんだ」

タシユケント「君にいわれたくはないかな……」

孤独に過ごした日々、いやもつと前からただの無機物だった時代からの日々か。戦いの日々明け暮れ、結末はこの世界の終焉だった。結局、全て無駄だったんじゃないか。

再構築しても、その先に待ち受ける未来はこの廃墟の鎮守府に戻ってくるんじゃないのか。

そうやって現実問題を冷静に処理する大人の理性で塗り潰せない感情こそ、本心からの答えだ。

ジエノ「とりあえず僕はお腹減ったから帰るよ」

なんだか毒気が抜かれ、身体力が抜けた。「あつ」とつんのめるあたしの腕を彼は取った。「反射神経が良いね。転びそうになる人を助けるのは職業柄？」

ジエノ「多分……物心ついた時から？」

そうだね。そうだった。本来、躓いた人を支えるのに理由はないよね。

なかば反射のようなやさしさに呆れ返りつつも、異常なほどの感謝の念が湧き出る。

あの半壊した執務室の壁に孤独にもたれる過去のあたしの幻影が見える。

生きる屍のようにそこに存在しているだけだ。なにを考えていたか、無意味な自己満足と悟りながらも、どうして一人で八十年あまりも管理妖精に抗っていたのか。

朝日の陽光が柔らかかに差し込んで、正の文字が刻まれた壁を鋭く優しく照らした。

過程となったそこにいる幻影に、思い出になりきれなかった鎮守府

のみみんなを連れて、花束を叩きつけ、「君は素敵な未来への種子だったんだ」とそう抱き締められる日が来るのだろうか。掘り返せば苦く血塗られた思い出ばかりが顔を出した。

弱い心と強い心が混ざり合い、まぶたが熱を持った。

タシユケント「もう一度、人を信じてみる」

タシユケント「君に、ついていく」

そうすがるような声で、囁いた。

タシユケント「今度、こそ……」

あふれる想いから連ねる言葉はなかば懇願で、甘えているような女の子の声音だ。ダメだ、本来、守るべき相手に対しての甘えに羞恥心が溢れ、止まらない。

でも、願い事は伝えておかなきゃダメなことだ。

どうせこの世界にはあたしと君しかいない。

言ってしまう。

タシユケント「今度こそ……!」

意を決した。強く目をつむって、大きな声を出す。

タシユケント「あたし達に、幸せな夢を見せて!」

彼は笑って、

ジェノ「よし、任せろ!」

あたしに負けないくらいのもうの大声で返事をした。

去っていく彼の後ろ姿を見送ってから、その場に尻もちをついた。

守るべき人間がいない世界。

広大な海、荒廃した大地。誰にも遠慮はせず、全ての手段を容赦なく使用し、例えばこの星に核の雨を降らしても関係ない。あいつらさえ倒せれば全ては戻ってくる。最短距離で進める舞台だった。

あお向けになった。大の字で寝転がる。

タシユケント「こんなに朝日が眩しく感じる日、久々だ」

結んである茶の髪の毛をくるくると指でいじくって遊ぶ。

抜けた天井の先の白んだ空を見上げると、一筋の流れ星が自由に横切っていく。

その光景を真の当たりにして、なにかの本で読んだロマンチックな

雑学を思い出した。
誰かを好きになる速度は、
本当に流れ星よりも速かった。